江戸前の海十六万呼を守ろう！

東京都は、すでに財政的にも破綻が指摘されている臨海副都心開発計画を着実に推進すると言い、その一環である江東区有明北地区の旧有明貯木場の埋立を地元住民や自然保護団体・釣り愛好家・釣り舟、遊魚船業者など、埋立中止と計画の見直しを求めている都民の願を無視し、強行する姿勢をとっています。

私たちは、3月7日には59隻の船を連ねた東京港では最大ではないかと思われる海上デモを展開し、11日には約190名を集めたシンポジウムを実施し、埋立計画事業計画の無謀性を広く都民に明らかにしてきました。これらは、TVや新聞各紙にも取り上げられ、埋立計画の問題点は多くの都民、国民に知れるところとなり、今や都民全体が共有する問題として捉えられつつあります。

これらの行動を準備し実施してきた「有明貯木場埋立反対海上デモ実行委員会」と「臨海部開発問題を考える都民連絡会」は、これまでの取組の上に組織を発展させ「江戸前の海十六万坪（有明）を守る会」を急きよ発足しました。3月21日には運輸省に対する要請行動を行い、そして27日に石原都知事と開会中の都議会の各会派に再度強力に要請行動を行い、同昼休みには大漁旗やノボリ旗をたなびかせて都庁に向けてデモ行進を行いました。

この旧有明貯木場は、東京港の奥深くに残された唯一の江戸前の香りと文化をたたえた海であります。明治から大正にかけて築造された石積みの緑豊かな史跡とも言うべき仮防波堤で隔てられ・波静かで浅瀬であるためにハゼなど魚介類が豊かで多くの釣り愛好家に親しまれてきました。

埋めてしまってからでは手後れです。この貴重な自然を取り戻すことは出来なくなります。都民の共有財産として、釣りもできる大規模親水公園としてみんなの力で残していこうではありませんか。

3月11日のシンポジウムの内容を冊子にまとめました。
ぜひご活用ください。

2000年3月。江戸前の海十六万坪（有明）を守る会

ハゼの絶好のつり場有明貯木場。500億円もかけて埋立てられようとしている。

主催者あいさつ　中野幸則氏

埋立反対が大きな世論に

今日はお集まりいただきまして有難うございます。先日の海上デモで、初めて船に乗った人もおられましたし、それから東京湾の中でこんな静かなところが残っていたのかと、こういう感想を述べた方もおられます。改めて有明貯木場のすばらしさを実感したということだったと思います。それと合わせて何故こんなにいい場所が東京港の中に残っているのか、そのことにも関心を持っていたようですが、このすばらしい水辺を東京都は何故埋めるのか、ここに沢山の人の関心が集まっているというように感じています。

この有明貯木場の埋め立て事業計画そのものについては、すでに事業計画の説明をかねて、地元での環境アセスメントなどが行われました。そして昨年の 8月にこの管理をしています港湾局が、都知事に対して運輸省に埋立免許申請をする手続き準備に入って欲しいということを行いました。その上で都知事は、 2月 24日付けで運輸省に申請をしました。
先ほどお話がありましたように「これは受理をしていない、お預かりしたんだ」ということで運輸省も判断に苦しんでいるようです。私達も昨年の 12月に運輸省に対して要請を行いました。この臨海開発の中で有明貯木場の埋め立ての必要性はもう無くなっている。
計画そのものが頓挫して、地元の住民の人達、とりわけ、この有明貯木場のすぐそばで住んでおられる方々、 2つの自治会がそれぞれ石原都知事に対して「埋め立てをやめてください」という要望書を出しました。

これまで 10年弱の間の中で住民がこれほど明確な意思表示をしたことはなかったです。臨海都民連に参加して、一緒に臨海副都心開発問題を考え、開発の抜本的な見直しを、多くの人達が運動として取り組みました。私達は今、名前が長いので臨海都民連という言葉をよく使っていますが、それ以外にも 5年前に青島都知事が誕生する時に「青島さんなら臨海開発を見直してくれる」と思って、青島さんを応援した市民グループもありました。この人達も青島さんが公約を守ってくれると思っていましたから、当然一生懸命やっていたのですが、わずか半年弱のうちに青島さんが態度をかえまして「臨海開発を推進する」ということを決めてしまいました。色々な過程がありましたが、そういう人達、他にも市民グループも一緒になって臨海開発を見直そうではないか、見直してもらおうという運動をずっと続けてきました。むろん、その間には先日の海上デモを一緒に参加された、船宿の方やあるいは釣り業者の方達も 3年前には海上デモを自ら組織して行ったり、今回のように広範な都民を含めてということではありませんでしたが、長い間の運動がここへきて一つの世論に変わってきていると紹介させていただきます。

有明貯木場埋立事業の概要

有明貯木場の事業内容については、今日皆さんのお手元にお配りをしました、オレンジ色の資料集があります。この中で詳しくみていただきたいと思います。ただ、この臨海副都心開発の中で、これまで住宅問題というのは、商業や通信業務ビルあるいはテナントビルの建設、それからフジテレビ等、マスメディアの一部やホテル関係、アミューズメント、娯楽施設などについては一定の形で導入が図られていますが、実際に、それ以外の本来都民が望んでいるようなことについては、ほんんど後回しにされています。

その中で最たるものが、やはり住宅問題、環境問題、とりわけ、この環境については、今日、パネラーの方達の中からも、より詳しいお話がありますが、最初に行ったレインボーブリッジ建設、これが出来上がって事前のアセスと事後のアセスが全くの桁違いで、とんでもない結果が出たことについて、東京都に対して改めてアセスのやり直し、これからの開発全体を含めた、広域な総合的なアセスの実施を求める運動などもずっとやって来ています。環境問題がこれから臨海部の中でもよりひどい問題になるだろうし、住宅問題では有明の貯木場の住宅建設は臨海副都心計画の中でも一番最後に計画されたもので、それぐらいに取って付けたような計画です。この10数年間の間に周辺の住宅事情はかなり変わっています。バブルがはじけて地価が下がったり、あるいは住宅がなかなか手に入らないという問題もありましたが、一定の住宅の需要が生まれる中で、民間の不動産会社をはじめ、住宅にかなり力を入れています。その結果、臨海部のとりわけ、豊洲地域といわれている豊洲、枝川、辰巳、東雲、港区ですがお台場等の地域にどんどん住宅が建ち、これからもまだ江東区の住宅係の方で調べた中身をみると、江東区の中でも1万6000月計画されています。その中には有明の貯木場のすぐ側にある三菱製鋼工場跡地に6000戸の住宅計画がありますが、これは含まれていません。こういうことを考えると、すでに住宅は充分足りているのではないか、それなのに東京都はここに9000戸の住宅をつくるというのです。これが今、港湾局、住宅局の中でも一定の見直しの意見が聞かれています。そういうことを改めて考え直す機会ではないかなと思います。

また、財政の問題は、都民の直接くらしに係わる、教育や福祉の分野がどんどん切り捨てられ、今度の東京都の来年度の予算の中で、1000億円を超える福祉予算カ湖られます。その一方で、臨海開発については、湯水のようにお金をつぎ込みます。有明貯木場について言えば、これまで港湾局は埋め立てにかかる費用を400億円とみて、これを起債で行ったり、借金を作りますから利子を払ったり、区画整理等をやっても「600億円はかからない」と言っていたのに、これには直接道路建設なども係わってきますので、実際には1300億円を超えるお金が必要になってきたのです。この点は今東京都は黙っています。600億円ぐらいだということだけを言ってその後は黙っています。やはり、財政の立て直しという問題からみても、こういった開発優先の無駄遣いにきちんとメスを入れ、それはどこで入れるかというと、やはり、臨海開発、これほどあからさまに都民の税金がどんどんつぎ込まれて、採算も取れなければ、借金が膨れ上がるという部分は無いわけですから、ここをきちんと見直さない限り、東京都の財政赤字はとても解消できないということも考えられています。

貴重な自然が残る有明貯木場

それから、有明の貯木場という場所がどういうところかなということを改めて考えてみますと、東京湾全体が浅瀬の中で、東京港の墨田川に沿った改修工事に基づいて、埋め立てが行われてきたわけですが、大正11隼にすでに有明貯木場の仮防波堤は船でもないと渡れませんが、この部分はその時に計画されて作られました。そして昭和5年に東京港の改修工事計画で有明の貯木場が作られました。その沖は、今のお台場や青海地区や有明南地区は全くの海という状況の中に整備をされました。東京都はこの場所は造成した場所だから、自然の場所ではないような言い方をかなり強めています。しかし、この場所を埋め立てた経過と、東京湾の海の改修工事の経過をみていくと、早いうちにそういう状況になっただけに、その状況のままずっと60数年間放置されてきた場所という意味では、まさに自然を残した場所はここ以外に無いと言っても良い場所になっていると思います。

だからこそ今東京港で魚が釣れない、ハゼが釣れないと盛んに言われる中で、あの場所に行けばハゼも釣れる、魚もいるという状況が広く都民の中に知れ渡って沢山の釣好きの人達がここに来て楽しんでいるという場所です。そういう点からも自然が残された場所で、それに恵まれて東京湾の魚が沢山この場所にはいるという、唯一残された場所だということも多くの人達が関心をもっている内容の1つではないかと思います。

「保存する会」をつくろう

それから工事スケジュールについては、先ほどお詰ありましたが本年度、4月から着工しようとゴリ押しの姿勢を強めています。しかし、これも5年間計画です。実は私達が東京都に「有明貯木場の埋め立て事業内容に関する情報を開示しなさい」という情報開示請求を1月にしたものが2月に少し出されてきました。これをみるとまともに情報を出していません。こういったことも私達は運動で明らかにしながら、都民の皆さんに広めています。それから有明貯木場の埋め立て事業計画は単なる埋め立てではない。埋め立てた後にここには幹線道路、高速道路、橋を含めて4本、ここに入ります。これが環境悪化、大気汚染や交通渋滞、この大きな原因になることはハッキリしていると思います。今でもこの地域については、環境基準の例えばN02がすでに平成8年度の段階で0.07ppmから豊洲においては0.075ppmという数字が示されています。それにも係わらず、将来の環境は大した事ないと盛んに言わなければ、この事業が進められないという矛盾したアセスを行っています。こういったことを含めて、私達は有明貯木場が、都民の皆さんの気持ちに応えうるような、憩いの場所にしたいということを、この10年間運動の中で取り組んできました。今日のシンポジウムについては、釣りを愛する人達から、環境問題から、そして直接環境を調べられている水産試験場で勤務されている方から、色々なお話をしていただき、その上で皆さんで、この恵まれた自然をどうすれば残せるのか大いに議論して、今の石原都知事に私達の声を是非聞いてもらいたいと思います。海上デモを行い、今日のシンポジウムを皆さんと一緒に行い、「この後どうするんだ」という意見もあると思いますが。これも有明貯木場を保存する会のような物をできれば作れたらいいかなと、そして皆さんと一緒に運動にしていきたいと思っています。
雑駁ですが有明貯木場をめぐる幾つかの条件と問題点についてお話をさせていただきました。どうぞよろしくお願いします。

司会・市川
どうもありがとうございました。この埋め立て工事に着工するための予算は、来週14日15日、都議会の予算特別委員会で集中的に審議されます。是非都議会での論議に今日のシンポジウムで出された声を反映していただいて、なんとか埋め立てを止めさせるということで、とりわけ、都議会議員の皆さんには頑張っていただきたいと思います。
今日、このシンポジウムに幾つかの都議会の会派の方がおみえですので、ご紹介申し上げます。日本共産党都議団からは東ひろたかさん、小竹ひろ子さん、清水秀子さん、民主党から和田宗春さん、自治市民93の福士敬子さんの皆さんです。また、民主党の馬場ゆう子さんは所用のため展示をご覧になった上でお帰りになりました。

シンポジウム

コーディネーター　矢野政昭氏

それではこれからシンポジウムを始めさせていただきます。今、報告なり司会からもありましたように、この十六万坪といわれている有明の北、ここがどういう場所なのかというとも含め、また、臨海副都心の色々な問題も合わせて考えなければいけないです。この2つの問題を是非みなさんと一緒に考えたいということで、こういうシンポジウムを開いたわけです。早速始めさせていただきます。私はパネルディスカッションの司会をします臨海都民連の事務局の矢野と申します。よろしくお願いします。

　それでは最初にパネラーの皆さんをご紹介しまして、順次、有明主体についてお話を伺いたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

皆さんから向かって左側が安田進さん、安田さんは去年、一昨年にこの埋め立て問題がでてきまして、「何とかしなければ」ということで遊漁船、屋形船利用者の会を作りまして、その代表をしております。また、仕事も釣り舟や屋形船を営業していまして有限会社晴海屋の部長さんでございます。

　続きまして加藤憲治さんです。都職労経済支部の水産分会の方でございまして、お仕事も水産試験場の主任研究員で、東京港も含めた研究をなさっている方です。よろしくお願いします。

　次に藤田敏夫さんです。私達の臨海部開発問題を考える都民連絡会は発足してからあしかけ11年になりましたが、その初代から10年間代表世話人をしていただきまして、臨海副都心の問題を一貫して運動してこられた方です。また、今日は大気汚染測定運動の東京実行委員会の事務局長としてもパネラーとして参加していただきます。資料の中にも藤田先生の紹介がありますので、是非お読みいただきたいと思います。よろしくお願いします。

　続きまして鈴木康友さんです。株式会社釣り人の社長さんです。後ろで「釣り人」のバックナンバーを販売しております。私も釣りにはあまり縁がなかったのですが、十六万坪になりましてから「釣り人」を買って読んでいます。「釣り人」誌がなかなか買えないんですよね。私も江東区に住んでいますが、本屋に行きますと「もう売れました」と言われ、他の人に聞いても何故か最近「釣り人」がどんどん売れているということで、今日も買って行って下さい。というのは十六万坪の問題については非常に詳しく書いてあります。こういうシシポジウムは眠くなりますから、眠くなる方は寝て、本を買っておくとだいたい今日のシンポジウムもわかるということで、1月号、2月号、3月号はもう無いそうで、4月号を是非お買い求めをお願いしたいと思います。鈴木社長は先ほどお聞きしましたら、有明北の貯木場にシーズンは週2回は行っているということです。海の上から下の方まで充分に把握している方で、ハゼについても大変おもしろい話が聞けるのではないでしょうか。

　今日はこの4名の方、それぞれの専門の分野からお話をいただきますと、日本ではこれ以上のないパネラーで、．最もあそこの研究をしているのはこの4人の方ぐらいなので日本一ということになりますので、あの場がどういう場で、どういう状況にあるのかというのが、充分わかるようなシンポジウムになるのではないかと期待しているところです。それでは早速ですが、左側の安田さんから、パネラーはだいたい20分ぐらいお話をいただきたいと思います。とくに安田さんは釣り舟の営業もしていますので、釣り人の気持ちもわかる立場からお話をいただきたいと思います。

よろしくお願いします。

残り少ない江戸前の海

ありがとうございます。海上デモにつきまして、本当に皆さんにはご協力いただき、誠にありがとうございました。船宿業者も約60社近く出まして、本当に今回の問題の危機感というのを、遅いと言ったら本当に遅く、また、当たり前だと言ったら当たり前ですが、やはり余りにも対応が、足並が揃わず遅かったと本当に深く反省しています。本来、江戸湾と呼ばれていた頃の遠浅の海はまさに魚の宝庫で、この一帯は遠浅の海で魚がいっぱいいました。しかし、江戸初期から始まった埋め立てによって、今現在の海がこのような東京港の港みたいになってしまったわけですが、唯一まだ江戸湾と呼べるような遠浅の海が残っています。それが我々が今携わっている十六万坪、有明貯木場の遠浅の海ですね。この遠浅の海にはハゼばかりか海にいるキスやスズキ、ウナギ、海老、蟹、浅蜘、色々な魚がまだまだいっぱいいるわけで、まさに大都会に残った遠浅の海がここにあるわけです。こういうレインボーブリッジの真近にこんなに海の魚がいる、おそらく東京都民の方も知らない方がいると思いますが、当たり前と言ったら当たり前のことだったのですが、あまりにも港みたいになってしまった為に、そういった感覚を失っていると思います。遠浅の海は太陽の光も差し込んで、酸素も充分に湧き、プランクトンが多く、底の泥に蓄積されて、微生物、餌となるものが湧いて、それを食べに小さい魚が来て、またその小さい魚を食べに大きい魚が来る、鳥もいっぱい集まる、まさにうまく食物連鎖された遠浅の海です。

遠浅の海だからこそ公共事業がやりやすく、埋め立てが行われてきたのですが、江戸前という海はいったい何処までのことをいうのかと考えたら、都民の方も東京湾を全部そういう見方をしている方もいると思いますが、東京の目の前にある海を江戸前だと私は思っています。実際地図でみて、あとどれだけ江戸前の海は残っているのかと考えたら、昔から考えたらほんの5分の1しかなく、その中でも生物が生息している部分は有明貯木場ぐらいしかなくなってしまいました。

これは我々商売をしている人間にとってもそうですが、東京都民にとっても、また、江戸前のお寿司屋さんも大変な問題だと思います。江戸前という言葉がお寿司屋さんにとっても、ただ東京にあるお寿司屋さんみたいな物になってしまうし、我々も江戸前の船宿といっても、自分のところの海がなくなってしまっているのでそういうことも言えなくなっていく、こんなに寂しいことはないと思います。

とにかくあの場所は丘の方からもあまりにもわかりづらいところにあって、船であの場所に行った方でないとあまりにも知らないです。そういう中で、今回の埋め立てが行われるのは、はたして本当にいいのか。今回海上デモによって、まず都民の方に見た目だけの価値観でもいいから、あの場所を知ってもらいたかったのです。
その後にかならず目で見えない水の中の価値観を、我々はこれから絶対みせていかなければいけない。今、東京都知事のやっていることは、目でみえている物をうまく利用してことを運んでいるわけですが、ディーゼル車にしてもそうですが、あのエンジンは大変優秀だと思いますが、目でみえる環境破壊の煙のガスが都民の方も都知事を支持しているところもあるし、銀行の貸し渋りも目にみえているからこそ、我々も支持してしまうところがあるわけですが、その2つの問題を抱えたのがあの場所であって、税金のことも環境破壊のこともそうです。水の中は目でみえないからこそ、都民の方も気付くことができないわけです。

一度失った自然はとり戻せない

ですから我々は水の中の価値観と共に、目にみえない水の中の環境破壊もみせていく必要があると思っています。都民の方もこの前に魚がいることすら知らないわけで、水も汚いと思っていますが、青い海が締麗だとか、茶色い水が汚いのかといえば、こういう茶色い水であっても魚にとっては素晴らしい水であるかもしれないのです。現に魚もいるのであって、白い砂が見た目は緒麗かもしれないけど黒い砂は汚いのかというと、黒い砂には餌となる物がいる、つまり餌にとっては大変素晴らしい物であるわけです。そういった見た目だけの価値観で考えてきたことが、全て東京の自然を失ってきたと私は思っています。ですからこれからは本当に価値観のあるものを、我々が見分けていく必要があるわけで、目でとらえた価値観だけを捨てて、本当に見極める力を持つ必要があると思います。最後に残された江戸前の海です。

東京都の調査でハゼの生息孔は羽田の多摩川から比べたら有明の貯木場は50分の1しかないということです。だったらそれでもかまわないと思います。確かに50倍の魚がいたとします。有明貯木場は50分の1。つまり、あそこで1日に釣る数というのは、舟が40艘でて1艘平均20人乗せるとしたら、4万匹、5万匹という魚が釣れていくわけです。それが2ヵ月も3ヵ月も続くわけです。そしてまた次の年になると同じ数の魚があそこに湧くわけです。つまりそれだけ価値のある、つまり生息し続けることのできるすばらしい海なのです。

では多摩川はどうなのかといった時に、多摩川からもみんなこの有明の貯木場に来るというのは、やはり、50倍の魚がいたとしても、何らかの理由でそこで生息し続けることができないのです。もしかしたら有明貯木場に入って来ている可能性もあるし、駄目になっている可能性もあるかもしれない。また、東京からずれた沖の方に行っているかもしれない。けれど江戸前にいるからこそ価値があるわけであって、どこかへ行ってしまうというのは本当に寂しいことです。

トキ1羽戻すのにもどれだけの時間とお金と人が携わってきているのかと考えた時に、もう1羽を作るために大変な時間がかかっているわけです。今、佐渡の方でもまたそのような開発をしてトキを呼び戻そうとしていますが、自然というのはそんなに甘いものではなく、自然が創った自然というのは人間が絶対に割れないものであって、そういった考え方は絶対にやってはいけないことであります。

ハゼがたとえ多摩川に50培いたとしても、最終的には有明貯木場の50分の1以下の結果になってしまうわけです。つまり、あそこはたとえ50分の1であっても、全てが生息し続けることのできるすばらしい環境を持った、江戸湾から伝わる遠浅の海だと思っております。我々は最後になった江戸前の海をみんなで守って行きたいと思います。もしあそこを失ったら、千葉や東京の方に商売として船を出した時に立場がなくなります。自分の海すら守れないのか。なぜおれたちは千葉や神奈川で商売ができるのかというと、地元の人達が守っているから我々もできるわけです。その自分達の海も守れずに、千葉や神奈川に行くことはつらい立場になります。我々があそこの貯木場が使えなくなるとか、そういう死活問題は本当に小さなことであって、あの環境を失うという大きさははかりしれないものです。もし、あそこが残るのであれば、私個人的にはあの中に入れなくなってもいいと思っています。あの中で商売ができなくなってもいいと思っています。それぐらい貴重な場所で、本当に都民の財産として残してもらいたいと思っている場所です。

23区で水辺に面した区というのはそんなにありません。なかでもそこに生物が生息しているというのはほんの何区なのです。まさに価値のある場所だと思っております。世田谷よりも本当に価値のある場所だと思っております。どうかその価値観というのをもう一度考え直して、見た目だけのそういったものに捕らわれず、本来そういった自然がある、目の前のものをもう少し皆で見つめなおして行きたいと思います。

海の底も東京であるように、今度は上ばかりでなく海底をなるべく見よう。そこにはもっとすばらしい価値のあるものも見えてくると思います。これからは是非とも水辺に立った時には、足元の水面を見て、その下に何かいないかな、魚はいないかなと探してもらいたいと思います。もしかしたら驚くような場所に魚がいるかもしれない。そのありがたみ、その価値観、魚がいるだけで江戸前は価値観があるような状況になってきているのです。どうか江戸湾に昔魚がたくさんいたように、またこれからもそのような海に戻すことは大変かもしれませんが、今あるものを最低でも残すことを我々業者も考えていきたいと思いますので、どうか皆さんご協力お願い申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

「江戸前の海」の歴史　　加藤憲治氏

こんにちは。水産試験場の加藤です。今日私がシンポジウムに呼ばれたのは、水産の研究をやっているからということだからだと思います。しかし水産試験場で東京湾の研究をやっているといっても、海に出るのは1月に1－2回ぐらいです。そして網を引いて調査して、その結果を実験室で標本を調べたり計算をしたりしているわけです。ですから海の中のことというのは、毎日のように海に出ておられる安田さんのような漁師さん、あるいはこの後お話される鈴木さんのような釣り人の方違が一番よく知っているわけです。では水産の研究者は何をやるのかというと、そういう人たちの体験や経験というのはある法則を持っています。それをある程度体系づけ、整理、法則化して、後の人たちも同じことができるようにしていくというのが、私達の仕事だと考えております。

実は東京都の水産試験場は有明の調査はやっていません私達の調査地点に入っていないのです。というわけで、有明のことは安田さんや鈴木さんの方がよくご存知だと思います。そこで私は東京湾の魚全般について概略の話をさせいただきたいと思います。

今安田さんのお話の中で、「江戸前の海」という言葉がありましたが、まず江戸前の海というのはどこかという話をしましょう。人によって色々な解釈があると思いますが、私が言う江戸前の海というのは、西は多摩川の河口、羽田空港のところ、東は旧江戸川の河口、ちょうどディズニーランドのあるところです。向こう側は千葉県で手前側には葛西の臨海水族園があります。この二つの川の河口の沿岸の前の海。それがまさに本当の江戸前の海と定義したいと思います。

江戸前の海岸というのは、かつては全部浅い海だったわけです。浅い砂浜が広がっていたわけです。それで簡単に歴史をお話させていただきますと、大森の貝塚というのがあるぐらいで、昔からたぶん食べ物がたくさんあったようで、江戸前の海には太古から人がたくさん住み着いて、貝を獲ったり、魚を獲ったり海老を獲ったりして暮らしていたのだと思います。ただその頃の活字になった資料というのはないので、江戸時代以降の話をします。今日のシンポジウムの題名が「江戸前のハゼと自然と文化」ですが、私は文化というのがキーワードだと思います。本で読んだ知識ですが、今皆さん海苔を食べますよね。おにぎりにしたり朝焼いてご飯に乗せたりして食べますよね。この海苔の養殖はどこから始まったかご存知ですか。これは江戸時代に江戸湾で始まったのです。どのようにしたかというと竹や木の枝の先の枝分かれしたフサフサしたところ、竹箒を1本抜いてきたようなところ、あれを遠浅の海の砂底に刺すのです。そうすると海苔の種がつきまして、冬になるとどんどん繁殖してくるわけです。その大きくなった海苔の葉っぱを摘み取って、きざんで干して作ったのが海苔です。この会場の真後ろにパネルがありますので後で是非ご覧になって下さい。海苔をつける竹や木の枝のことをヒビといったのです。

今日比谷公園というのがありますが、あそこはヒビのあるところということです。日比谷という名前はまさにその海苔をつけた枝からついたということで、名前に海苔が保っているわけです。

豊かだった江戸の食文化

ついでにもう一つ江戸時代の話をしますと、江戸前のてんぷらというのがあります。キスのてんぷら、アナゴのてんぷら、ハゼのてんぷら、いずれもおいしいですね。たぶん皆さんは食べた事がないと思いますが、キンポのてんぷらというのがありますが、これは江戸前の代表的なてんぷらです。てんぷらというのは、色々な説がありますが、南蛮渡来の料理法だろうということになっております。それが江戸に来て江戸前の新鮮な魚を揚げて始まったのが江戸前てんぷらです。今、日本全国てんぷらいうと江戸前てんぷらをやっているわけです。ということで、てんぷらについても江戸時代から始まった大切な文化です。ですから、十六万坪へてんぷら舟が行ってハゼを揚げて食べているというのも江戸時代からの文化なのです。

それからウナギの蒲焼です。先ほどの安田さんのお話の中でウナギと出てきた時に、ウナギは淡水魚ではないかと思われた方もいると思いますが、川へ上らないウナギもたくさんいるのです。マリアナ海溝のウナギの産卵所で生まれて半年ぐらいかけてウナギの稚魚が黒潮に乗って東京湾に入ってくるわけです。入ってきたウナギの稚魚は川へ上るものもいます、ですが川へ上らずに7，8年から10年ぐらい海で過ごしてそしてまた産卵に戻るものもいるのです。その証拠に江戸湾というのは昔からウナギの一大産地だったのです。明治から昭和の初期にかけて、年間400トンも取れた年があるのです。ウナギを取るカマという漁具もあります。今でも品川の駅から旧東海道という幅5－6mの細い道があるのですが、あの両脇にはウナギ屋さんがとてもたくさんあります。落語の好きな古いらっしゃいますか。居残り左平治という落語をご存知ですか。居残り左平治に、居残った左平治が「荒井屋の中串でもとってくれ」というセリフがあったと思うですが、その荒井屋さんというウナギ屋さんが、いまだに旧東海道沿いにあるのです。ウナギの蒲焼自体は関西から来たと言われていますが、やはりこういう文化も江戸湾のウナギで非常に発展したのです。

昭和30年代後半から東京湾の汚染は始まった

それから、今東京湾はきれいだと思っている方は少ないと思います。たしかにそんなにきれいな海とは言えないのですが、ではこの海がいつ頃汚れたのかというお話をさせていただきます。私は昭和26年に生まれたのですが、昭和31，32年の頃まだ幼稚園児だったと思うのですが、親父に連れられて川崎の駅前に潮干狩りに行ったことがあるのです。こんなに大きなハマグリがごろごろ獲れまして、喜んで獲って来ました。今は埋め立てられて海は遠くなっていますが、川崎の駅前でハマグリが獲れたのです。翌年また春になって潮干狩りのシーズンです。また親父と一緒に出かけたのです。そうしたら海がないのです。埋め立てられてはるか遠くに行ってしまっていたのです。昭和30年代の始めの頃というのは、まだハマグリが獲れたのです。現在も千葉の方へいけば他何からもってきてまいてあるものは獲れますが、今東京湾で天然のハマグリが獲れるところはもうありません。

その昭和30年代の始めの頃に獲れた魚であと何があるかというと白魚です。多摩川の漁師さんに聞いたら昭和32，33年頃までは白魚が多摩川に産卵のために遡上していたそうです。今は白魚もいません。それからアオギスですね。アオギス釣りというのは有名な脚立釣りという東京湾の風物詩だったのですが、今アオギスは日本全体でも有明のほんの一部にいて、天然記念物になってしまいました。東京湾ではもちろん絶滅です。あとはサクラマス。川から下ってきてサケのような大きなものもいました。それから芝海老は江戸前のてんぷらでは最高のネタだったあですが、ほとんどいなくなりました。ところが去年この芝海老が戻ってきたのです。これはすごいです。

昭和30年代の始めころは大森海岸や品川の海で泳げました。ですから魚もたくさんいました。それがいつ頃から汚れたかといいますと、昭和30年代の後半です。昭和39年、東京オリンピックがありました。あれに向かってどんどん汚れて行きました。
昭和40年代に入って昭和45年ぐらいが汚れのピークでした。その頃漁師さんの話しを伺ったことがあります。江戸前の魚が水が汚れて最初にいなくなったのが赤い魚だち。その次にいなくなったのが青い魚だち。最後まで残ったのが黒い魚だというのです。これは何かというと、赤い魚は鯛です。鯛がまず水が汚れていなくなった。青い魚で表的なのは鰯です。鰯の仲間が、さらに水が汚れていなくなった。水が汚れても最後まで残っていたのが黒い魚でハゼだったのです。ところが昭和45年前後の何年間かはそのハゼさえもいなくなりました。まさに東京湾は死の海と言われていたのです。
私はちょうどその頃品川の東京水産大学へ入学しまして、毎朝品川の駅から10分ぐらい歩いて通ったのですが、途中に品川の運河を通るわけです。その水面がボコボコ硫黄の匂いのする泡で夕立のようになっていました。もちろん何の魚もいませんでした。
ところが昭和45年に、さすがにこれはひどいというので、与野党の皆さん賛成せざるを得なかったのですが、いわゆる公害国会で、公害防止関連法案カ可決されて、これを機会にして東京の海や川の水質は徐々に改善されていきました。

昭和50年代になると、まずハゼが戻ってきました。昭和50年代に入ってしばらくすると多摩川に天然の鮎も再び上ってくるようになったのです。そしてつい最近1990年代に入ってまもない頃に、さっきお話ししたサクラマスという魚が戻ってきました。
上流にはヤマメという魚がいるのですが、それが海へ下ってサケのようなマスになってまた川を産卵に上ってくるのですが、それがたぶん40年ぶりぐらいにに戻って来たというのです。それが今の状況です。まだ赤い魚は戻ってきていない。青い魚ぐらいまでなんとか戻って来たというところです。

CODというとあまり聞いたとがない人が多いと思いますが、海の汚れを示す尺度なんです。これでみていきますと、昭和30年代の始め頃というのはCODが2mg/ℓよりも低く水はかなりきれいだったのです。ところが水が一番汚れて死の海といわれた時代はCODが7以上まで上がってしまったのです。これでは生き物は何も住めません。
現在はどれくらいかといいますと、3～4ぐらいで横ばいです。これ以上きれいにはなっていません。色々な魚が戻ってきましたが、ハマグリや白魚が戻ってくるのにはまだ十分でないと思います。

魚が住めない海には人も住めない

何よりも海の中に入って皆が泳ごうという気になるかどうかというのが水のきれいさの一つの尺度だと黒います。これは川も同じです。私は生まれが立川ですので、東京湾というのは比較的最近水産試験場に入ってからのおつきあいですが、物心ついた時には多摩川で釣りをしていました。

従ってお魚さんとつきあって40数年になるのですが、その中でとくに水産試験場に入って、魚の研究者となって以降感じるのは、「魚が住めない川や海というのは、人間が住むのにも絶対に適していないのだ」ということです。川でいえば、そこで泳げるということは泳ぎながら水を飲んでいるわけですから、当然その水は安全なわけです。ですからそういう川には魚もたくさんいます。海もそうです。そこで泳げるということは皆水を飲んでいるということです。ということは安心して飲める水、それが魚がたくさんいる海であり、人が安心して住める海です。我が杜の知事も、ディーゼル車排気ガスの規制をやるそうですが、根っこは同じだということです。つまり、有明の問題についても、ハゼが住めなくなるというのは、人間の命に関わってくる問題で、根本的にはディーゼルの問題と同じだと思います。ですから我が社の社長にこの問題について理解をしてもらいたいと強く思っております。ただ職員としては微妙な立場にあるわけです。社長に逆らうと色々給料のことなどありますが、それはそれとして、

私は水産試験場に勤めておりますので、ハゼの立場にたってものを言いたいと思います。今申し上げたようにそれは人間の立場にたってものを言うということですので、ディーゼル車の規制をしようという知事の立場と同じだと考えております。

最後に安田さんが言われたことで、ハゼが毎年毎年わいてくるということについてお話したいと思います。有明貯木場は何百万というハゼが毎年毎年くると思います。これはとても大事なことなんです。石油とか石炭とか燃やしてしまうとなくなってしまう資源というのはもう2度と再生できません。ただ生き物というのはそうではないのです。魚というのは、100匹いた魚を95匹ぐらい獲ってしまうと、あと5匹はバラバラになってオスとメスー緒になって産卵できません。そうするとそれは獲りすぎて種が絶滅してしまうわけです。トキもそうです。かわいそうでしたね、佐渡のトキ、最後には2羽か3羽になってしまって、つがいができなくなってしまって絶滅してしまった。ですから生き物というものはある限度獲りすぎるとそこでアウトなのです。ではどうすればいいかというと、100匹ハゼ銀行の利息を考えてほしいのです。生き物を守るということは、元本に手をつけず銀行の利息の分だけ獲っていくということです。それが最高のやり方なのです。「このくらいまでならとってもいいよ」というのを調べる、それが私らがやっている水産資源学という学問です。

ここまでは獲ってもいいよという量をきちんと守る、そうすると毎年毎年、未来永劫に私達の子孫の時代までハゼが東京湾、江戸前の海で獲れるわけです。私達がその数を出すというのも大切なのですが・そうでなくても漁師さんや釣り人というのは感覚的にそのあたりがわかっているのです。もう3年も4年も魚がとれなくなってしまって、このままではいけない、少し禁漁にしようというようなことになるわけです。私達はそれに対して・計算して理屈づけはしますが、本当にわかっているのは漁師さんや釣り人なのです。

いくつかお話をしましたが、生き物というのは未来永劫に資源を守っていかなくてはいけないものなのだという意味で、埋め立てというのは非常に大きな問題だと思います。世界の海からすれば、どんな海でも面積は微々たるものになってしまいます。従って藤前干潟だって埋め立てようと思えばやれてしまうわけです。そうではなくて有明が江戸前のまさに貴重な場所だということです。ということで安田さんのお話の後づけを少しさせていただきました。

ただごとではない臨海副都心の大気汚染　藤田敏夫氏

只今ご紹介をいただきました藤田です。今日は、有明の江戸前のハゼと自然と文化を守るシンポジウムにお招きいただきまして有難うございます。私は、この江戸前のハゼと自然と文化の中で、自然の問題について少しお話させていただきたいと思います。私は25年ぐらい前から都民の皆さんと一緒に、親指ぐらいの小さなカプセルを使って、大気中の汚染物質である自動車排ガスの二酸化窒素ガスを測定する運動をやってまいりました。最近では測定する人がどんどん増えまして、東京では6月と12月に毎年約15，000から20，㎜カ所で測定が行われますし、今から8年前にはこれが全国に広がって、北海道から沖縄まで測定運動が行われております。99年の12月までに測ったものを集計してみましたら東京ではのべ500，000カ所以上の測定一をやったことになります。これは大変な数でありまして、環境庁などがやっております数に比べても何十倍も多くのところで測定されているということになります。この測定場所の中で臨海副都心で都職労の港湾支部の皆さんが毎回33カ所、同じ定点で測定を始めてから、もう5，6年になります。今日はその資料が私のレジメの15ページのところにあります。

これをみますと、「臨海副都心の大気汚染というのはただごとではない」と書いてあります。図の1というのがあります。これは99年の6月の3日・4日に測定した結果を図の上に表わしたものでありまして、環境基準の1.3倍以上高い、0．08ppm以上のところに網がかかって影がついております。環境庁が決めている環境基準というのは0・06ppmですから、この中心にあります有明町の所では0.12と書いてありますね、これは環境基準の2倍にあたります。このように副都心全体が汚れた空気で覆われている。これはこの年だけではありません。98年12月に測定した結果が大きなパネルであちらに示されておりますので、ご覧になっていただきたいのですが、だいたいこれと同じようなタイプです。いつやってもそうです。実はこの小さいカプセルでやってそんなことがわかるのかというと、つい2，3日前に私、環境庁に行きまして、平成10年度の環境庁が調査いたしました、大気汚染の測定結果の資料集というのをもらってまいりました。それを見ていましたら、有明の南の10号地というところにフェリー埠頭がありますが・そこで東京都の環境保全局が毎日1時間毎に測定をしておりました。その値がなんと全国でワースト1です。驚きました。なんでこんなところがワースト1なのかと、よく考えてみましたらフェリー埠頭ですから、大型の車がどんどん来て、フェリーで九州へ行ったり北海道へ行ったりするわけです。でも湾岸道路に比べれば少ない方です。それでもワースト1なのです。湾岸道路の方でははかっていませんから、ここではかったらワースト1どころかワースト0ぐらいになるのではないかという気がいたします。

大型車の増加が汚染の原因

なぜこんなことになるのだろうか。これはとくにレインボーブリッジが出来てから、それからもう一つは台場と有明を結ぶのぞみ橋というのが開通してから、非常に台場、有明の交通量が増えたわけです。このノゾミ橋のたもとにクリーンセンターという、有明の清掃工場があります。これが不思議に毎回やりますと、このクリーンセンターの角のところが副都心で一番悪いところになります。皮肉ですね。どうしてかというと東雲のほうから有明を通って台場へ抜けて台場から湾岸道路へ入る大型軍が増えてきた結果です。

つい先日3月1日に都磁労の港湾支部、台場の方々のご協力を得ましてレインボーブリッジの台場の出入り口で朝7時から夜6時まで1時間毎に交通量を測定しました。その結果、1日に6万7315台でありました。大型車の割合が26．8%です。大型車といっても普通のトラックではなくてトレーラーの大型が多いのです。こういう車が台場の出入り口から出たり入ったりしているわけですから、当然悪くなるわけです。ちなみに、そのことは3枚目の17ページをあけていただきますと、図3というのがあります。
これは東京都港湾局と首都高速道路公団がこのレインボーブリッジを開通させるにあたり、事前に環境アセスメントという予測調査をいたしました。そして開通しましてから、平成7年に事後調査といって、その予測した値が妥当であったかどうか調べようということでやった結果があります。それから4年～5年後に私どもが地元の方にご協力いただいて自主的に調査したのが、今回調査の平成11年11月ユ日です。この下の方の図は今年の3月1日です。上の方の図はこのすぐ先の芝浦埠頭駅からレインボーブリッジーへ上がっていく、一般道路で調査した結果ですが、これを見て下さい。一番左が平成4年に出された評価書の予測、これが1万6000台くらいです。平成7年にそれが妥当であったかどうか港湾局が調べたのが約2万7000台です。これだけ増えてしまったわけです。だから予測は当たらなかった。さらに昨年の11月に私どもが同じ場所で調べましたらなんと5万7000台ぐらい。この倍ぐらいになっている。恐ろしいものです。下の方は先ほどいいましたように台場の出入り口で、同じように今回調査した3月1日は予測事後調査の約倍です。これだから、ただごとでない大気汚染がこの臨海副都心を覆っている、台場、有明を覆っているということになります。

埋立てれば、さらに環境は悪化

先ほど安田さんから目に見えない海のことに目を向けて下さい、という話がありましたが、大気汚染も目にみえないのです。メガネをかけても見えません。この見えないところで釣り舟を浮かべて映適な海で釣りをしていますが、実はその方々が吸っている空気はこんなに悪いのです。1日あそこで釣っていたら、かなり悪い空気を吸っているはずです。あるいは釣りの愛好者の中には喘息患者さんがいらっしゃるかもしれない。そういうことになっているわけでありまして、その証拠に16ページをあけて下さい。図の2というのがあります。これをみますと上の方に書いた折れ線グラフは昨年の11月の1日から7日までの1週間いろんなところで、職を測定した結果です。右のほうに測定場所は書いてありますが、他のところは別として、この有明町一丁目の海よりの方で測ったもので、これがダントツであります。その下に0，06のところに横一線の線が引いてあります。これが環境基準です。
ですから、この有明一丁目のあたりは、1週間ずっと環境基準を上回っていたということになります。下の方は棒グラフに表したもので、有明一丁目はどう見ても悪い、こういう結果になっているわけであります。悪い、悪いというお話で恐縮です。
有明貯木場を埋め立て海がなくなってしまうということ、私達にとって非常に貴重な自然がなくなるということは、今お二人の話でわかったと思います。埋め立ててどうするんだという問題です。東京都は、ただ原っぱにしておくわけではないようです。そこに33階建ての超高層マンションを2棟建てて、9000人の人を住まわせる。
それから商業施設も作ります。そういう計画があるわけです。それを前提にして埋め立てているわけであります。

あらたに20車線もの道路建設

東京都は何を考えたのか、あの銀座から築地を通って来る晴海通りが、今、晴海三丁目のホテル浦島のところで止まっています。いま盛んに拡幅工事をやっています。拡幅して、それをずっと延ばしてきて、晴海から豊洲、有明に道路を作っていく、その間に橋がかかります。その道路がなんと、その一般道路の上に高速道路、高速晴海線というのを乗っけてくるわけです。高速晴海線が4車線、下の晴海道路が6車線ですから10車線になります。更に、そのすぐ西側に環状2号線という道路が高速道路で入ってきます。それもやはり6車線です。それを横切るように補助315号線というのが台場の方から入ってきます。それが4車線。合計20車線です。

今の湾岸道路は、湾岸高速線が4車線で、下の国道357号が6車線ですから10車線です。これと同じものが有明に2本入って来るということです。そこに住宅を建てる、そんなところに住宅を建てたって、今のこの状況からすれば、有明は人が住めないところになってしまう。そういう馬鹿げた計画を同じ東京都の役人が立てる、これは無駄遣いですよ。

こんなところに住宅を建てたってしょうがないじゃないか。台場だって今3000人入っています。私も去年の11月に台場の都営住宅の1階で騒音測定に参加しましたけれど、道路から20メートル離れていても大変な騒音であります。そこにお住まいの方に聞いたら、「実は東京都から入居の時に、ここは前に大きな道路があるから騒音がうるさいですよ、それでよろしければと言われて入った、だからあまり文句は言えないんだ」という話をしていましたけれど、東京都は欠陥住宅を貸したり売ったりしているということになってしまう。今度建てる住宅もそういうふうになってしまうということは明白であります。海を埋め立て、なくしてしまって、そこに道路が20車線入ってくれば今でも湾岸道路でこんなに汚れているところに、更にその2倍も入ってきたらどうなるんですか。

採算度外視の武士の商法

こういうことを考えない、それが武士の商法というものなんです。そういうところに欠陥住宅を建てて、そこに都民を住まわせようとしても、そんなところに入る人はないですよ。それよりもさっき初めに中野さんがお話になった、東雲の方の三菱製鋼所の跡地に6000戸建ちます。あそこの方が駅にも近いし、道路からちょっと入ったところです。ですから、そこの方がずっといいし、あるいは汐留の跡地にも住宅がたくさん建つわけです。わざわざ不便なところまでゆりかもめに乗って来なくても、新橋の駅の目の前に住宅がたくさん建つわけです。こういう状況の中で、環境のわるいところに建てるということ自身が、全く採算性度返しして、公共事業で決めたから建てるんだという武士の商法的な考え方、これは改めてもらいたいというふうに思います。それでは、時間もあまりありませんから、環境影響評価ということで、これやってくれれば良くなるのではないかなと、ほのかな希望を持っている人もいると思うのですけれど、レジメの！4ページの5番のところに書いてあります。この時予測した交通量は、なんとこの有明地区について言いますと、1日12万1000台の自動車交通が予測されています。晴海通りを拡幅して3万5000台、高速晴海線が3万7000台、環状2号線が3万1000台、補助315号線が1万8000台、合計12万1000台の車が集中すぞと予測していますけれど、この予測値は、先ほど申し上げましたとおり必ず外れるものです。もっとこれの2倍くらい増える、そうすると20何万台になってしまう。

0，034，O．035，O，030と書いてあります。これは、実は1年間の平均値で予測しています。これを2倍すると環境基準に適合するかどうかを判断する値になるんです。そうするとこれはO．068とか0．07とかO．06とか、この予測値だって環境基準を越えているわけです。さらに予測が外れるということは常識ですから、こうなったらとんでもなく住めなくなってしまうということになります。

でたらめな環境アセスメント

先ほど再三申し上げましたけれど、レインボーブリッジ周辺の環境アセスメントがこんなにでたらめだったと、我々は近く東京都港湾局並びに首都高連道路公団に申し入れに行こうと思っています。行くと彼らはこう言うと思います。「もう10年経っているから社会情勢が変化したんだ。だからこうなるのはその当時予測が不可能だったんだ」。それではその予測の中に村会経済的な変化というものを入れてなかったのか。入れてないわけです。今のアセス条例ではそういうことをやらなくていいということになっています。だから外れるんです。そういう点では、この臨海副都心は実は最初の計画のとき、これが完成したら1日31万台の車が増える、東京都環境保全局がちゃんと広域的な予測調査をやったんです。そうしたらここは大気汚染の環境基準を越えてしまう、ここだけではなく東京全体にも影響を与えるという結果が出ているんです。

ところがそれは環境保全局がやったことであって、港湾局は俺は知らないよと、そういうことで縦割り行政の中でこういうことが強行されてきた。ですから石原さんが今になって、我々が前から東京都に要求してきたディーゼル車ノー作戦というのを取り挙げてくれていますけれど、そういう一方でここで益々汚染を広げて、それを東京中に波及させようとしている。あるいは中央環状新宿線という地下高速道路を4車線通そうとする。あるいは外郭環状道路、今もう関越まで来ているのをずっと湾岸道路まで通そう。あるいは今日皆さんのお手許にお配りした、高尾山にDメートルの直径のトンネルを2本掘って高速道路を通す首都圏中央連絡道（圏央道）計画。石原さんはこの三環状計画は断固進めると言ってやっているんです。それは都心の交通量を減らす為だと、そういう環状道路ができ札ば都心に用のない車はそっちを通ってくれるから都心は減ると言っていますが、実は東京都が調査した結果では、交通量というのは23区は23区の中だけで行ったり来たりしている車がほとんどなんです。23区と三多摩の問を行ったり来たりする車はわずか4，5%しかない。三多摩は三多摩の中だけ、23区は23区の中だけで行ったり来たりしている車が多いということは、東京都の自動車公害防止計画にちゃんと書いてあるんです。そういうこともご存知無くて、そういう無謀な計画をごり押ししようとしている。建設省と首都高速道路公団、あるいは日本道路公団と一緒になって、やはりゼネコン奉仕の公共事業をやっていこうというのがあの三環状計画です。最近は時々大きな紙面に両面一杯の広告が出ますけれど、そういうことでやっております。

時間が参りましたので、私の方からは、ハゼを釣る人の為にもこれ以上大気汚染を悪くしてはいけないということを串し上げまして、お話を終えさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

味が違う十六万坪のハゼ　　鈴木康友氏

毎週 2回ずつ深呼吸しているんですが、これがあまり体に良くないということで、ちょっと心配になったところでございます。私は、つり人社という釣りの雑誌の出版社の人間です。たまたま今回の運動のきっかけになった「つり人」で連載した十六万坪の件があったので、ここに座らせていただいていると思います。実は安田さんのところに行って、こういうことをやりたいんだという話をした時に、「それでは鈴木さん是非話をしてくれ」ということになった理由が、これはただ単純に釣り人だからだと思うんです。今日は毎週行っている船宿のおやじさんも来てくれているので、後はどお話を伺おうと思いますが、そのおやじさん達にも「なんだお前また来たのか」と毎週言われているぐらい釣りをしているのですが、まずはハゼの話と、文化の話を少しさせていただこうと思います。

石原さんは「埋め立てなんかしたってハゼは何処がへ行くよ」という話をされた、それはそうですよ何処かへ行きますよ。何処かへ行くのだけれども、はたしてあれだけのいい環境のところが他にあるかというと、加藤さんのお話も安田さんのお話も全てそうですけれど、絶対無いです。東京で最後の釣り場であるということです。理由の 1つに、これは釣りをしている人でなければわからないと思いますが、とにかくハゼの味が違うんです。

シーズン初めは十六万坪まだこんなに小さいんです。ですからあんまりこの辺ではやらないで、木更津だとか長浦だとか千葉県側に行くんです。その辺で釣れる魚や横浜の方で釣れる魚と比べますと全然味が違うんです。これは中の泥の養分とか、そういうことにあるのではないかと思うのですが、例えば利根川も釣れますし、大阪の方でも釣れます。ハゼなんてどこでも釣れるんです。ハゼなんてと言っても私達真剣にやってるんですが、どこでも釣れるんです。ただ、味が全然違うんです。長年こういう仕事をやっているものですから、北海道から九州まで全国にたくさん釣り仲間がいますが、その仲間と話していると「お前、ハゼごときになんでそんなに真剣になっているんだ。ハゼなんて皆同じだろう」というんですが、そういう人達に釣った魚をさばいてクール宅急便で送ってあげるんです。そうするとすぐ「すいませんでした」って電話がかかってくるんです。違う、別物だということです。味が全然違うんです。甘味もありますし、身の固さといいますか、例えば他のところで釣った魚を甘露煮だとかなんかにする時に白焼きにして干しますよね、そうすると殆としゅーつと細くなってしまうんです。ただこの東京湾の、とくに隅田川河口周辺の魚は全然違うんです。江戸川のとも多摩川のとも違うんです。この辺の魚はぽこっとして身が締まっていておいしいんです。ということで、実は食い意地がはっていることもありまして、是非残したいと思うのです。

江戸前の釣り文化

それから、江戸前の文化ということでお話しますと、あんまり大仰な話ではなくてただ釣りの文化ともう 1つ釣り竿です。江戸前の釣りというのは、先ほど加藤さんに色々お話をいただきましたけれど、アオギス釣りとか、カレイ釣りとか、ボラ釣りとかクロダイ釣りとか、今やっているシーバスではない伝統的なフッコ釣りとか、アナゴ釣りとか、極端に言うとそういうものが全て消えてしまったんです。全然無いんです。

そういう釣り自体が成り立たないんです。そういう釣りがたくさんあって、とにかく 1年中色々な釣りがあって、その釣りの為の竿を作っていた竿師さんが東京にはたくさんいらっしゃったんです。

その人達が技を競って、いわゆる子供達が使うような竿が、昔釣り具屋さんに一杯竿が並んでましたよね。ああいうものは手軽な安い竿ですが、それ以外に工芸品と言われるくらいのレベルに達した竿がたくさんあったんです。これが全ての釣りにあったんです。それがほとんど今絶滅してしまった。作る人もいなくなってしまったし、使う人もいないというのが現状です。その中で唯一残されたのがハゼ釣りなんです。ハゼ釣りの江戸和牛は中通しの竿で、2本の竿でやるのですが、こういう釣りができる環境が他に無いんです。例えば江戸川でも多摩川でもありますが、そういうところでは、悲しいことに私達がほぼ毎週やっている練り舟という、船頭さんが舟を練ってくれて、練ってくれるということは一番釣りやすい状態に釣り糸を立ててくれるんです。普通は風もあるし、波もあるし、湖もあります。川の場合は流れがあります。ですから糸がまっすぐ立たないんです。そうすると当たりが取りにくいし釣りにくいんです。リールで投げて引っ張ってきてしまえばそれは釣れますけれど、本当の江戸前の釣りというのはそういう釣りではないんです。その釣りをやりたいんだけれど、それをやってくれる船宿さんがほとんどないんです。

江戸和牛は伝統工芸品

私が毎週通っているのは深川の門前仲町にある富士見屋さんというところですが、今日はそこの社長が体調が悪いにも関わらずお見え頂いております。その船宿さんでは船頭さんが5～6人、船も5～6隻、昔のまんまの船を残してくれていて、櫓が1本80万とか100万とかいうもので、もうできないといっているようなものです。そういう状況ですが、それを残してくれてやってくれているので私はそこに通っているんです。他にはそれすら無いんです。むしろ若い船頭さん達には、おじいちゃん達はやれる人がまだたくさん残っていらっしゃいますから、勉強してもらってやってもらいたいなと思いますが、それもままならないのが現状です。

ハゼ釣りの竿ですが、これは通産省が認定する伝統工芸品なんです。これは江戸和竿だけです。他の地方にも京竿とか庄内竿とか紀州の竿とかありますが、伝統工芸として認定されでいるのは江戸和竿だけです。これは何故かというと、実は通産省の認証式の時に取材に行っていたんですが、その時に通産省の認定した課長に「私は釣り道具だと思う、道具だからそんなもの伝統工芸にするのはおかしいんじゃないだろうか」というふうに話をしたら、その課長がおっしゃっていたのは、普通の、例えば焼き物とか、お碗作るとか、人形作るとか一杯ありますよね、伝統工芸品って、あれは全てが分業なんです。1から10まで全部やるものは無いんだそうです。

江戸和竿というのは、最近は竹を切る人達もいなくなって自分達で切りに行っているんです。切ってきてそれを大体3年とか4年干して、それから切って、その後作業がたくさんあるんです。漆を塗ってお客さんに渡すまで、そこまでの全てをやるのが江戸和竿です。これには竹を使う人達の技術が一杯ありますね、籠を作ったり何かする。それから矢竹というのは弓矢の夫なんです。あの矢を作る技術とか、元々今の江戸和竿の漆の根本は、刀の鞘を作る鞘師の方から、一番最初東作さんの初代さんが教わったのだそうですけれど、そういう技術が一杯詰め込まれているものなんです。竿師の方はもう10数人しかいないんです。メンバーとしては20何人かいるんですが、釣り具屋さんとか元そういう商売をされた方というのが入っているので、実際には10数人しかいらっしゃらないんです。今日は仲間の有名な年師の方がお亡くなりになって、一周忌だということで、全員そちらに行かれているのでお見えになっていないのですが、一番若い人でも昭和10年か11年ぐらいの生まれの方です。それ以外のいわゆる名門の親方達というのはもう75歳とか80歳近い方々です。

その人達には跡継ぎがいないし、弟子も取れないんです。というのは、もう食えませんからね。東作さんというのは江戸和牛の一番最初の本家本元なのですが、そこでは今6代目さんという名人がいらっしゃって、私らも隼を作ってもらっているんですが、その人のところも伜さんが大学を出てから跡を継ごうとして年師をやったんですけれど、これでは食えないというのでお辞めになってしまった。他のところの年師さんのところも、伜さんがいらっしゃるところは全員他の仕事に就いていらっしゃるんです。これはなぜかというと、それは全てこの埋め立てのせいです。埋め立てをされてしまったことによって釣り場が無くなってしまった。釣り場が無くなったら当然釣りをする人がいなくなるから、竿を買ってくれる人がいないという単純な図式なんです。そういうことでだめになってしまった。この前海上デモの時の最後に都会議員の方にお願いをしたのですが、今日も先生方がいらっしゃるのでお願いをしたいのですが、通産省の伝統工芸で認定されているのと同時に、東京都知事が伝統工芸として認定をしているんです。ですから、認定をした年師達を、ここを埋め立てをすることによって、抹殺してしまうのか。

これについて是非文句を言っていただきたいと思います。そして、その舟も段々減ってきます。最近江東区の方で和舟の櫓を漕ぐ講習会というのを趣味でやっている人達がいらっしゃるんです。安田さんともお話をしたのですが、若手の船頭さんを集めて、船頭さん皆で勉強会をやろうじゃないかと、釣りをやる人間もやってみようじゃないかと、残っている舟を何とか大事に使いながら、皆でそういう釣りもしてみようじゃないかと、その為にはあの場所も絶対残っていなくてはいけないので、運動にそれも1つデモンストレーションとしてやろうじゃないかという話もしているところです。

十六万坪では「ハゼが湧く」

専門的な話ではないのですが、釣り人としての話をちょっとさせていただきたいのです。安田さんがさっきお話になっていた多摩川の河口と十六万坪の生息孔、生息する孔と書いているのですが、その名前もちょっとおかしいと思っているのですが、その50分の1という数字が出ているんです。東京都の環境アセスですかね。先ほどの加藤さんがおっしゃったように、十六万坪は東京都の水産試験場の調査範囲ではありません。
多摩川の河口は水産試験場の方がお調べになって、こちらの方は業者が調べた。
時期も違う、規模も違うということで不審なところがあるのですが、もう1つは、釣りをやる人はほとんど分かっているのですが、ハゼというのは先ほど「ハゼが湧く」と言っていましたが、生物が湧くなんて、魚が湧くなんてちょっと失礼だなとか、ハエじゃないんだからとかいうのがあって、私どもの「つり人」という雑誌では「ハゼが湧く」とは書かないことになっているんですが、実は言葉では言っているんです。何故がというと、湧くように穴から出てくるんです。その穴が生息孔と言われているんですが、これは産卵の為の穴なんです。ハゼの穴に石膏を入れて抜き出して、ハゼの穴が土の中でどうなっているのかというのを、確か昭和46年か47年に水産試験場でやったんです。今でも水産試験場の中にあります。それがこんな太い状態で、結構高いんです。人間が立っている背くらいあって、それに枝別れしているような、蟻の巣程ではないのだけれどそういうような感じのものです。それが産卵する為の穴なんです。ここで考えると辻棲が合わないことが一杯出てくるんです。というのは、ハゼが湧くように出てきた、これは穴の中から出てきて、それから水の中を漂って浅瀬に行くんです。これが大体5月か6月、その小さなやつが本当に岸に一杯、べったりいるんです。この辺でいくと京浜運河からお台場から、もちろん十六万坪とか、その辺の水路にたくさんいるんです。月島だとかああいうところに行くと、護岸のこういうところに、たくさんいるんです。

これが段々夏になると、ちょっと深いところに行って、秋になってきて私達が舟で釣るような深さになるんです。大体2メートルか3メートルとか5メートルぐらいのとこになるんです。大体15メートルとか16メートルぐらいのところまで釣ったことがあるのですが、そのくらいまで魚が落ちていくんです。これはデキハゼといって最初にこういうやつがいて、一番最後はオチハゼという呼び名なんですが深いところにいくんです。それから産卵するため深いところに入っていくんです。こ札がハゼの一生のサイクルです。大体ハゼは1年で死んでしまうんです。中にはヒネハゼといって産卵しそこなってというか、残る2年魚がたまにいますけれど、殆どは1年です。これがサイクルです。

十六万坪はハゼが成長する場所

そういう意味でいくと、あの十六万坪は水深がせいぜい2メートルか3メートルぐらいなんです。一番深い水路で、私ども釣り舟で測ったことがあるのですけれど、それでも外側の水路で5メートルぐらいしかないんです。中は大体2メートルか3メートルです。そういうところは産卵場所ではなくて成長する場所なんです。浅いから太陽の光が一杯入って光合成もしますし、プランクトンも一杯あり、小動物も一杯いて餌もたくさんあるから、成長する場所なんで産卵する場所ではないんです。そこと多摩川の産卵する深いところと比較するということ自体が間違っていると思うんです。加藤さんが魚の元気度とか何かによって、産卵をする時間が違うと言いましたよね、早く産卵をするのと遅く産卵するのがいて、十六万坪でも産卵するだろうというお話ですが、絶対量として、あの十六万坪では少ないと思うんです。ただその周りの豊洲だとか東雲だとか水路がたくさんありますよね、ああいうところは水深がありますから、あの周りにはかなりたくさんのいわゆる産卵孔があるだろうと予想するんです。それでないと先ほど安田さんが言ったような数の魚が釣れるわけがないし、先ほどの話のとおり、東は浦安から西は羽田から、船宿さんがこのシーズンになるとあそこに集まって来るんです。もちろん風があって他では釣れないから来るという例もありますが、魚が釣れるから来るんです。天ぷらするとか、屋形船でちょっと屋形の上に乗っかって釣りをしたり、色々な楽しみ方をする方々がいらっしゃるのはやはり魚がいるからです。単純に50対1だとかというんだったらそんなに魚がいるわけはないので、本当だったらもっと広い範囲で調査をして、その比較をして欲しいと思います。

波風の影響も少ない十六万坪が環境的に何故あそこがいいかという理由がもう少しあります。例えば、私どもの「つり人」という雑誌ではそういうことを色々やっています。加藤さんと同じようなお立場の研究者の方で、神奈川県の工藤さんという方です。この人が「つり人」の中に書いてくれている記事があるんです。それを見ますと、江戸川なんかの場合は、産卵して出てきて流れに乗っていきますよね、今の葛西臨海公園の周りとかあの辺の浅瀬に、昔のサンマイズというところ、そういうところに行ってハゼが育つと言われているのですが、風が吹いたり台風が来たり、その時期に雨が降って大量に水が流れると散ってしまうわけです。そうするとそこではある範囲の中で釣りの対象にならなくなってしまうんです。多摩川もそうです。

ただこの十六万坪は墨田川河口のちょっと左側ですね、ということは台風が来ても大雨が来ても大風が吹いても、川の水が流れてだ一つと海に流れても、あそこはその影響を受けないんです。大量に真水が入るのもハゼにはよくないんです。それが影響を受けにくいということもあります。それと、波も風もあんまり影響受けない。こういう場所は東京湾ではここだけ、最後の釣り場というのはそういう意味もあります。

納得いかない、釣りに対する役所の認識それと、釣り人の立場で単純にお話しますと、お役人の釣りに対する考え方というのは、少し納得いかないところがあります。みんな加藤さんみたいな人がお役人だといいなと思うのですが、赤坂の弁慶橋というところにブラックバスがいるんです。ブラックバスを釣る子供達がたくさんいるんですが、そこがずっと釣り禁止と言われているんです。最近はボート屋さんが「ボートで釣るのは良いけれど他はいけない」と言ったりするふざけた話なんです。随分前の話ですがこれを禁止にされた時、東京都の水産課に電話したんです。そうしたら、これは雑魚といってヤマメやイワナと違って禁漁、解禁とか体長制限が無いんです。フナとかコイとかヤマベとかと同じです。ですからいつ釣ってもいいんですよということなんです。それでは誰が禁止という看板を出したんだろうと調べていったら、港区の土木課だったんです。港区の土木課の人になんで禁止にするんだと聞いたら、なんと「あそこは世界の要人がお通りになるところだから、釣りなんかしていたら見苦しい」というんです。もう頭にきまして、「私はロンドンを流れるテムズ川でも釣りをしましたし、パリのセーヌ川でも釣りをしましたし、ニューヨークのハドソン川でも釣りをしたのだけれど、あなたははそういうところを見たことがありますか？ニューヨークやパリやロンドンよりも東京の方がでかいんです。

その世界一の都会のど真ん中で釣りができるということは、いかに環境がいいかということで自慢すべきだろう」という話をしたんですが、全然理解してくれませんでした。

ということがお台場にも言えるんです。お台場は元々海上公園構想といって、ハゼ釣りの場所として開放した場所なんです。泥も入れてきれいに整備したところです。それが今は釣り禁止なんです。何故がというと、釣りが見苦しいです。ウィンドサーフィンはかっこいいからいいんです。私はかっこいいと思いませんけれどね。でもそういうことらしいです。東京湾の砂は元々白ではなく、グレーから黒です。先ほど話がありました栄養の豊富な土というか砂なんです。これをなんと白い砂入れて、ハワイのビーチのものまねごとなんかして、そういうところにハゼは住めないんで、そこからちょっと離れた遊覧船の外側のところは今も釣りはしているんですが、中側は全然釣りができなくなってしまいました。それもざまみろなんですが、3億円もかけて砂運んで来て、たった1回の台風で全部流れてしまったんです。そういう状況まで作って釣りのことを馬鹿にしているというか、とくに釣り人が馬鹿にされているなということがあるので、釣り人の地位向上というかもう少し認めてもらうために、皆さんにご協力をいただきたいと思います。もちろんマナーの悪い人もいますし、釣り糸の問題もあるので、それはそれで解決しなければいけないことがたくさんあるのですが、その辺も皆さんにご理解をいただきたいというふうに思います。

それと、これは去年の9月に出た「つり人」ですが、重工業を主体とした京浜工業地帯の企業が成り立たなくなってきている。新たに直して、釣り場にしようと鹿島建設の技術研究所というところが中心になっているのですが、県とか市とか大学とか釣り人の団体が一緒になって、京浜工業地帯をハゼのパラダイスにしようという運動を始めているんです。また戻すのは大変だと思うのですが、この運動をしている人達は「戻らないことはない、戻るんだ」と言っているんです。十六万坪というのはそんなことをしなくても、何にもしないでも残るんですから、何にもしないで欲しいというふうに思います。

是非ご協力お願いします。ありがとうございました。

会場からの発言

中村さん

　私、江東区で今度「東京港十六万坪の自然を守る会」という会の事務局長をつとめさせていただいております中村はやとと申します。皆さんちょっと窓の外を見ていただきたいのですが、先ほどから私達が話していますのはすぐそこなんです。すぐそこの十六万坪です。十六万坪は安田さんですとか鈴木さんが言われましたとおり、江戸時代からの自然が残っている場所です。私達はその江戸時代から残っている自然を、私達の子供に伝えていくためにあそこを守っていく、そのような運動をこれから開始していこうと思います。具体的には4月の8日ですが、「長靴をはきながら干潟を歩こう」、そのような会を行いますのでお時間のある方は是非ご参加ください。よろしくお願いいたします。

田久保さん

　田久保と申します。「三番瀬を守る会」と「日本野鳥の会」の東京支部の監事をやっています。今パンフレットを渡しますけれど、生データとして数字が一杯並んでいますけれど、水鳥の調査をやっています。ずっと20年くらいやっています。有明貯木場は20年前からではありませんけれど、10何年か前からはやっているんです。今、釣り宿の富士見さんの船を借りてやっています。割と東京というと都民もそうですけれど、海の方は全く無視というか開発の場所というような感じです。生き物がいないような雰囲気がありますけれど、水鳥もものすごくいるんです。大体都内の1割が湾岸の貯木場あたりにいるということです。
　数多いのは葛西の沖ですけれど、それに次いで多い。不忍池に鴨がうようよいますけれど、あの鴨よりもたくさん貯木場にいるんです、そういうのを、まったく水鳥に関係ありませんみたいなアセスメントを出して埋めてしまうのは、もっての外だと思っています。あと、カルガモという鴨がよく話題になりますけれど、貯木場の周りにある昔作った人工の島ですけれど、そこは人が立ち寄れなくて安全です。そこで繁殖する鴨がすごく多いんです。何百羽という数が繁殖しています。カルガモー家族ですごく話題になりますけれど、そういうのが何百羽と海のそばで繁殖しているということです。カモメとか鴨とかたくさんいます。それが何故いるかというと、人が来ないということも一つですけれど、安全であるということと、それからさっき出た魚を含めた餌が豊富であるということです。東京湾は汚れているというイメージが強いのですけれど、栄養がすごく豊富すぎるんです。だから魚がものすごい勢いで湧くんです。船橋に大野さんという漁師がいるんですけれど、東京湾そのものが養魚場だというんです。別に餌をやらなくても、湾に入ってきたものはすぐ太ってしまう。イワシを一杯捕っていますけれど、東京湾で獲れるイワシは湾内に入るとまるまると太って一番美味しい魚になると言っています。そのくらい栄養豊富なわけです。それでハゼも太って美味しいのかもしれません。それから、さっき財政の問題も出ましたけれど、東京はものすごい赤字を抱えています。僕も都の教員ですけれど、お金減らされてしまうというんです。減額です。そういうのに引き換えて、それで臨海開発を進めるなんてもっての外だと思います。
三番瀬についてはこの後大浜さんの方からもお話があると思います。

コーディネーター
ありがとうございました。田久保先生には私も仕事の上で何回か調査でお阯話になっています。先ほど加藤さんから役人はとんでもないというお話ありましたが、私も役人の端くれをやっておりまして、大変耳が痛いのですが、

是非皆さんの信頼を勝ち取るために頑張っていかなければいけないのだなと思っております。 6～ 7万いるといい人も悪い人もいますが、今日集まった人はほとんど悪い人はいません。安心してお互いに議論させていただきたいと思います。長い問安田さんも釣り舟でやってこられましたが、今日は先ほども加藤さんのお話にもありました門前仲町の富士見屋さんの社長さんが来られていますので、昔のこんな海だったということを是非お聞かせいただきたいと思います。宣しくお願いします。

もとは、くじ場と呼んだ十六万坪　富士見屋さん

今ご紹介にあずかりました、深川で船宿をやっています富士見です。私で 5代目です。去年からうちの 6代目も何とかやってくれるというので楽しみにしています。今までずっと聞いていて、もう私の言うことないな、安田君も鈴木さんもいいこと言ってくれているなと思って聞いていました。先生方もみんな同じような考えの人がここに揃っているからと思っていました。私はしゃべるとちょっと長くなってしまうので、少し短めに。野鳥の会の私に義理の兄貴がいます。今の会の方違と同じようにあそこへ行っていつも野鳥の生態を船を出して調べています。 5月頃、カルガモは背中に 12匹くらいひよこを乗せて、海面を泳いでいるというか闊歩している姿を見まして、今年も頑張って卵を孵したなというのを見ています。本当にカルガモにとってはあそこは東京で一番適したところです。

今言ったとおり離れ島ですから野犬も来ない、人間ももちろんたまにしか乗らないから天敵といえば鳥と蛇がいるというんですけれど、最近蛇の日向ぼっこあまり見たことないです。あそこで釣りをしていると、堤防のところに青大将のでっかいのがとぐろを巻いて日向ぼっこしている姿が前はあったんです。ここのところあまり見ないから、どうしたのかなと思っているんです。まあ、そういうところなんです。そのくらい自然の豊かなところなんです。あそこを貯木場と言っているけれど、前は深川の漁業組合のくし場といって、50メートル置きくらいに竹竿を立てて番号をつけて、春になると組合に行ってくじ引いて、当たったその場所のところでウナギを獲っていたんです。港湾局の司会をやっている方は、あそこが何年頃からいかだ堀になったかということは、数字で知っていると思います。あそこでウナギを獲っていて、ある時「来年からあそこ貯木場になるから、ウナギは獲れないよ」と言われたんです。親に随分「何でそんな馬鹿馬鹿しい話があるのか」と言ったら、昔漁師と取り交わした問題も実際あるらしいんです。それは昭和初期のことだと言っていましたから、私達の知らないことです。

プランクトンが豊宮な江戸前の海

2～ 3日前もあそこへ行って中を見ると、藻海老がたくさんいるんです。私達のいうホサ海老です。あれだけの海老がいるということは、やはり他の稚魚もいるということです。カメラマンも一緒に行って撮っていて、「見えるか」と言ったら、最初は「見えない、見えない」と言っていたんですけれと、そのうちに「すごい、たくさんいますね」と言って一生懸命カメラにおさめていました。そのくらい藻海老のいるところ。ということは、あそこはプランクトンが一杯なんです。貝もあるし、牡蠣もあさりもいる．それから赤貝の小さいの、我々はヤエンボ、エテボと言っていますが、その親類の貝もいます。今そこに見えている、東京ガスと東京電力のところは 30年くらいまで干潟だったんです。そこが潮が減ると一部干潟が出て、 30センチぐらいの水深になってしまうような場所でした。そこには烏貝がいました。烏員というと皆ムール貝を想像してしまうけれど違うんです。そこに居た鳥貝は、北海道のほっき貝、あれと全く同じ貝です。埋め立てるまでは、漁師の言葉で「しもっちゃう」と言いますが、船がもぐちゃうくらい獲れたんです。関東広しと言えどそこにしかいない貝だったんです。

埋立てで絶滅した豊富な生物

もうえらい問題なんです。またやなこと言っているなという人が中にはいるだろうけれど、それは本当にいなくなって絶滅してしまった、そこだけにしかいなかった。塩水と隅田川の川の水がうまく混ざり合って、その烏貝が生息していたんです。毎年毎年、それこそ湧いたんです。先ほど湧くとか育つとか言っていましたけれど、湧いたんです。そういう貝を絶滅させてしまった前例があるんです。

だからまた十六万坪を埋めれば、こんどはハゼです。私はそう思っています。この間もちょっとその関係の人が来たから、鈴木さんにも言ったんだけれど、「私ではなくて実際に獲っていて、舟がしもる程獲って毎日生計を立てていた人が、現在、深川の漁師にいるから、その人の話を今のうちに問いといてくれよ」と、本当にすばらしい貝だったんです。貝の形から見ると・増井さんという先生も加藤さんもいらっしゃいますけれど、あれは丁度北海道のほっき貝です。身もそんなような身でした。本当に都民の人で知る人はほとんどいないのではないですか。深川の漁師しか知らないです。そこを東京ガスと東京電力の為に埋め立てたんです。今言った、昔作った堤防の際にもそれがいたんです・お台場にも一部いたんです。だけどそこを埋め立ててしまったために、その貝が本当にどこを探してもいないんです。貴重な財産を無くしているんです。二の舞を絶対に踏んではいけないと思っているんですけれど、この間も進君に「あそこ埋めたら俺の体半分無くなっちゃったようなもんだよ」と冗談に言っていましたけれど、ガキの時分からあそこで育って、あそこでいろんな物獲って、ウナギはそれこそ嫌というほど獲れましたし、その時分獲れたのはカレイだとかスズキ、今でも捕れますけれど、東京電力、東京ガスを埋める前はもっともっと獲れたんです。さっき羽田が 50でこっちが 1だという言葉が出たんですけれど、どこでそういう数字が出たのか知らないけれど、向こうの方から釣れなかったら来ませんよ羽田とか浦安の方から皆あそこに来て釣りしているのですから。

生息孔は羽田の沖に確かにあるでしょうけれど、あそこにもあります。ある人がしらべたら「ある」というんです。だけどそれは東京都が捨ててしまっているんです。また今度その関係の人が潜ってくれるというから・よく調べてもらって、あってもなくてもあそこにハゼがいるということは間違いないです。毎年毎年湧くんです。稚魚にとって安全な十六万坪、鈴木さんみたいに来れば一足とか二足釣っていって、それでもまだまだ釣り足りない程いるのです。

ハゼが浦安の方でものすごくハゼ湧いても、それは湧くのは湧いても育たないんです。一度大雨が降るとどんと流されてしまったり、多摩川も同じです。今年は多摩川一杯ハゼ湧いたよと言っていると、でかい台風がきて大水で流されてしまいます。昔は一雨ごとにハゼが育つと言ったんです。今一雨ごとにハゼが死んでしまうんです。それは川の水が悪いからです。まだ完全に戻っていないからです。でもあそこに関しては川の水もあまり廻って来ない。それから一番の問題になっているアオコも入って来ないんです。稚魚にとってはあんなに安全な場所はないんです。深さも 2メートルとか 3メートルとか言っていましたけれど、この 3月 4月の大潮の干潮の時には昼間一部海底が出ます。そのくらい浅いところなんです。浅いところでないと、うちのおやじがよく言っていました「あそこは宝だよ

あそこは東京都の偶然残った 20世紀の宝だから、その宝を無くしてしまうようなことはしてはいけないよ」と。私こんなこと言ってるけれど、これ言うとまた圧力がかる。何となく圧力がかってきて、夜も寝られないことがあったんです。実際にそうなんです。ある変なところから電話がかかってきて、そうしたら仲間の同業者の人が「お前夜歩く時気をつけろよ」と言われたんです。昔のことあまりにも知りすぎているのもいけないのかなと思っているけれど、あそこで育って、あそこで飛び込んだりしてウナギを捕まえたりなんかしていたから、知っていることは全部後の人の為に語っていかなければいけないと思っています。

今日もちょっと体調が悪いので途中で帰ろうと思って電話したんです。そうしたら「帰っちゃだめだよ戻ってこいよ」って、それで思いなおして東京駅からここまで来たんですけれど、具合良くないんです。これで具合よくないんです、具合よければもっともっと倍くらいしゃべるところです。

三番瀬も十六万坪を守る運動に連帯　大浜さん

ここにお出での方は、ご存知だと思いますが、東京湾の千葉側の一番奥、市川・船橋の海岸に残っていま連す浅瀬、干潟、これを私達は三番瀬と呼んでいます。その三番瀬を守るために約70の団体が協力して、署名ネットワークを作って署名活動をやっております。

現在22万5000署名を県に提出しました。その22万の署名活動には東京都民の方も非常に熱心に協力をしてくださいました。例えば先週の日曜日にも東京都勤労者釣り団体連合会の総会に呼んでくださいまして、私の発言の場を与えてくださいました。是非それに応える意味からも、私達もこの有明を守る運動に連帯をしたい。この署名ネットワークの幹事会が一昨日開かれまして、そこで決議をいたしました。千葉県からでちょっと離れておりますけれど、なにかの時は是非仲間に入れていただいて、ご一緒に運動したいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

この機会をお借りしてち’よっと三番瀬のことをお話したいと思います。三番瀬というのは、日本地図には乗っていません。地図にない名前ですが、江戸時代から漁師達が使ってきた海の中の地名です。ここの海を守るために87年でしたか、初めて私達は守る運動の中に「三番瀬」という名前を登場させたんです。千葉県は昭和30年代の前半から埋め立てに着手して、実は東京・神奈川の方が埋め立てでは先進県なのですけれど、一挙に千葉県が日本一の埋め立て県になってしまった。1万5000ヘクタールの埋め立て計画を立てて、現在1万2000ヘクタールあまり埋めました。残っている3000ヘクタールというのは、70年代の初めに起こった埋め立て反対運動がくい止めたと言っても差し支えありません。

残っている場所は先ほど申し上げた船橋・市川間の三番瀬、木更津のハンズ、それから、富津、これが東京湾でも非常に大きな自然なわけです。この三番瀬では元々1000ヘクタールの埋め立て計画があった。これを70年代の初めに凍結させた。それが92年93年にかけてもう一回740ヘクタールの埋め立て計画として再登場した・私達はこれに反対をし続けて、去年101ヘクタールの埋め立て計画に縮小させました。しかし私達は101ヘクタールだろうと、あるいは今までの計画の7分の1であろうと、東京湾をこれ以上傷つけていいのだろうか。すでに今ある東京湾は五体不満足じゃないのか、この埋め立ての論理を7分の1にしたからいいとか、それから湾岸道路を通すためとか、あるいは流域下水道を持ってくるためとか、陸上の迷惑施設を海に持ってくる、あるいは土地を売ってそれで金をつくり出す、そういう埋め立ての論理を続けさせている限り埋め立てというのは止まりません。

今ある浅瀬、干潟はおそらくこれではまた半分また半分、永久に無くなってしまうだろう。やはり私達がここで埋め立てを止めさせる原点に立ちたい。それが私たちの署名運動の趣旨です。

三番瀬保存は世界の海の問題

三番瀬ではいまでも海苔も採れるし、あさりも揺れますが、皆さんの関わりの深いお魚を見ますと、ハゼもむろん本場の一つです。それからカレイも捕れるし、スズキやボラも捕れます。しかしこれは三番瀬の地元だけの問題ではなくて、先ほど鈴木さんがおっしゃってくださったんですか、神奈川県の水産試験場の工藤さんが研究されたところでは、三番瀬で生まれて育ったイシガレイが三浦半島から相模湾まで行ってそちらで獲れる。

イシガレイは実は三番瀬の釣りの対象ではないのですけれど、そこで生まれ育った魚が東京湾の入り口から相模湾まで行って獲れる、あるいは例えばアユですね、一番小さい時代に育つのは、皆さんご承知の通り浅瀬・干潟、東京湾で言えば三番瀬や三枚瀬で育ったアユが江戸川を逆上って利根川水系に登っていきます。しかもそれは江戸川の途中で、松戸の漁師達が稚魚で獲りまして、それを各地に供給している。千葉県下のイシミ川を初めとして、中川とか、西は相模川・鴨川にいたるまで供給しているということを松戸の漁師さんが言っていました。そういうふうに海というのは、決してその場所だけの海ではない。地元の私達が三番瀬を守りたいというふう考えるのは、これはまず第一の義務だと思いますけれど、同時にそれは広い東京湾全体の問題・あるいは世界の海の問題として考えなければならない。

渡り鳥にいたってはシベリアからオーストラリア・ニュージーランドにいたるまで三番瀬を通ってやっていくわけです。ですから、私達は埋め立て反対をしながら敗れ、また反対をし、そうやって今の．3つの干潟を残しましたけれど、73年に東京湾の埋め立て中止と干潟の保全を求める請願というのをを国会で通しました。72年、73年と2年続けて通しました。69国会と71国会です。何故2回やったかというのは、1回目ではとにかく干潟を残せと、これ以上埋めてはいけないと。2度目にはそれに補遺として今の凌洪埋め立てのやり方、海の底を掘って埋めるやり方の残酷さ、これは本当に埋め立て地だけでなくて海底まで破壊しつくしてしまう。今、東京湾で騒がれている青潮がその後遺症の代表的なものですけれど。これを禁止せよというのをつけて通したんです。これは国会で採択されているんです

ですから73年以後の埋め立て計画というのは、国会で採択された請願の主旨に反しているのです。

それからお願いですが、実は、私どもは三番瀬の干潟を守るということで署名をやっております。これもそちらに置きますので、是非帰りに署名をしていっていただきたいと思います。余分にありますから、持って帰って径ほどいただければたすかります。それから数に限定がありますが、これは三番瀬の干潟で採った貝殻です。これも置きますので、これは無料ですから数に限りはありますけれども持って帰って、家族の方とお話していただければいいなと考えています。よろしくお願いします。

ラムサール条約に参加を

一つだけ言い逃したのですが、やがて将来の目標としては、東京湾保全法をつくっていきたいということを申し上げました。もう一つ、浅瀬・干潟を守るためには是非湿地保護条約であるラムサール条約、こ札に東京湾の浅瀬・干潟を是非参加させたい。谷津干潟40ヘクタールとそして、これは海に面してはいませんが沖縄のマンクが去年参加しましたから、約100ヘクタールになりました。これに比べてドイツはどうかと言いますと、56万ヘクタールです。1万倍以上です。どうしたか。ドイツでは今ある干潟・浅瀬はそっくり子孫の手に譲り渡そうではないかというのが基本方針なんです。どうしてもやむを得ず今まで破壊してしまったところ、あるいは使っているところ、ハンブルクの溝とかブレーメンの港、これはしょうがないから外しています。しかし、それ以外は観光地であろうと、海水浴場であろうと全部にラムサール湿地にしてしまっています。ドイツの考えは全域です。是非、日本の海を守る政策をそういうふうに改めていって、海岸保全法をつくっていかなければならないというふうに、私たちは考えています。是非、ご一緒に頑張りましょう。

パネラーからの補足発言

鈴木氏

自然保護の話とそれにちょっと商売的なことが絡むのが釣り舟の業者さんとか、屋形船とかそういう方々のお話です。実は、これには3年半前に1回同じように海上デモをやったことがあります。これはある釣り舟の団体の方々がおやりになりました。というのは、これも皆さんもいつかはどこかでみたかなと思いますが、今日も何人がおみえになっている方々がいらっしゃるので、ちょっと耳の痛い方とかもいらっしゃると思いますが、実は、東京湾の釣り舟屋さんは、元々はさっき富士見屋さんが言っていたように、野口さんたちがいらっしゃいます。ですから漁業共同組合員の方々が釣り舟をやったり屋形船をやったり、昔は網舟というのもやっていたのですが、そういう業者になられた方がたくさんいらっしゃいます。その人たちが元にあって、それ以外に今度は遊漁船をやっている方々がそれの団体もおつくりになっています。実はそういうことで、前にやったのはその団体の方々です。

今回のやつも先ほどの都会議員の先生がおっしゃったのと同じように、あそこがやるからいやだとか、そういう変なセクト主義が実はあります。こういうことを消していかないと、運動はちゃんと成り立たないなというふうに思います。今回、この会にも実は、安田さんだとか富十見さんとかが入っている組織の方と違う組織の方は、今向の呼びかけで海上デモにも一隻も実は参加されていません。その人たちの中からも若手の方が今日、後ろの方にいらっしゃいます。そういうふうに関心をもっている方もいらっしゃいますので、もうそんなことを言っていられないというふうに考えていただいて、安田さんも実は今ここに上がって、上がり症らしくてこういうところにいると緊張していますけれど、そうじゃないとやたら生意気なことを言うやつなんです。なものですから船宿さんの仲間でもどうも晴海の小僧は生意気だというのが定説になっております。そいつがやるものですから、また益々そういう反感を買っているというのが実はあるのです。ただ、それは言っていられる状況ではないので、やっぱりそのぐらいの気概のあるやっというか、鼻っぱしらの強いやつがいないと、運動なんかできないと思います。ですから是非安田君には頑張ってもらいたいのですが、その他の組織の方々にも参加していただくように、金なりの方から働きかけをしていただいて、できたら、もうそんなことを言わずに全部まとめて釣り舟業の方々で組織をつくっていただいて、それで運動を展開していただかないと、難しいと思います。

やっぱり行政側としては分断作戦というのは当然やります、パワーが減りますから。そのパワーを抑えられないように、逆にまとまってもらいたいというふうに思います。長良川の河口堰の問題だとか、吉野川の問題だとか、あるいは最近では五木村の川辺川のダムの問題だとかたくさんあります。それで最近私もそういうところに関わっているものですから、色々な話を聞きます。最近鮎が釣れなくなった、これは話すとすごく長い話になってしまうのでやめますが、それで、危機感を感じている若い漁業協同組合の方々が最近増えてきています。例えば長良川なんかの場合は、漁業組合が一番下から四つに分かれているのですが、保証金をかなりもらっています。一つの組合で10何億とか人数によっても違いますがかなりもらっています。それを全部みんなで頭割りしてしまったところもあるし、半分国債を買って半分漁業組合の会館をつくったところとか、あるいは全て丸々で建物をつくったところとか色々あります。

その中の一つに中部漁協というところがありまして、下から2番目のところですが、そこは若手の組合員の方々が、保証金をもらったのは自分の親とかおじいさんたちで、「あんたらが何をしたが？」ああいう世界も実は稚魚を買う問題とかたくさんあるのです。これを問わない、不間に伏すから辞めてくれと言って、役員の方々を辞めさせてしまったのです。それで「おれは自分の子どもや孫に長良川の天然の鮎をみせたいから、あのダムは河口堰は是非あげてもらいたい」ということで運動を始めた方々がいらっしゃいます。同じように、豊川という愛知県の川ですが、ここでもやはり癒着をしていたりなんかする人たちも、あえて攻めないから、とにかくもう辞めてくれということで、新しいメンバーに替わってるというのがたくさんあります。ですから、こんなことを言うとまた文句を言われると思いますが、既にここの臨海の件については、ずっと昔に漁業協同組合だとか遊漁船の組合の方々も保証金をもらっているらしいです。これはもうあえて調べもしません。その人たちにあえて昔のことは言わない。ただ、やっぱりこれ以上の条件闘争はなし。絶対に埋め立てをしないでくれということで、若手の人たちが組織をきちんとまとめ直してやっていただきたいというふうに思います。

パフォーマンスなど多様な運動を

それと、今回のこ；れが一発の花火で終わったのでは全く意味がないですから、今後はこの有明貯木場保存会とか守る会とか何でもいいですが、そういう組織をつくって、釣り舟屋さんもそんな色々な組織のことを全部乗り越えて集まっていただいて、釣りをやる人たちも、ただ遊ぶだけではなくて、少しはお金も時間も使おうじゃないかということと、それからもちろん自然保護の運動をやっている方々、野鳥の会の方々とか皆さん含めて、みんなでそういう組織をつくって、定期的に都知事にアピールするとか、新聞やテレビや雑誌、今回も随分テレビや新聞が海上デモのことを報道してくれました。ああいうことをやっていただくためのパフォーマンスを、定期的にやっていく必要があるのではないかなと思います。実はこの前の海上デモの時に、テレビの取材の方とか雑誌、新聞の方とか皆さんに、今日もおみえになっている方がいらっしゃいますけれど、ハゼの天ぷらの話をしたら、みんな本当によだれをたらすような感じで、是非食べたいと言っていましたから、船宿さんだとか、釣り人もみんなでそういう人たちを招待して、天ぷらを食べてもらうとか、そういう運動をやっていけたらなというふうに思います。
是非今後ともどうぞよろしくお願いします。

コーディネーター
ありがとうございました。今後の方向も打ち出していただきましたので、色々皆さんと一緒に検討しまして、鈴木さんの提案を生かすようにしていきたいなと考えているところです。では次に藤田先生の方でよろしくお願いします。

第二湾岸道路が三番瀬保存の癌　　藤田氏

先ほどは道路計画で、高速晴海線だの2号線だのと言いましたが、この8頁を開けて下さい。 8頁にちゃんと書いてあります。こ札は環境影響評価の時に東京都が出した道路名です。先ほど申し上げましたとおり、ここに高速晴繍泉、放射34号、これが今の晴海通りの拡幅延伸です。それからその隣に環状2号線があって、それから一番左の方に補助315号線というのがあります。これをみていただきますと、高遠晴海線と放射34号線は海の方で湾岸道路とつながっています。ですから、これが湾岸道路を通行している車、あるいは湾岸道路に出る車がここのところひっきりなしに通るわけです。

そういうふうになります。湾岸道路というのは今大変渋滞しています。そのために第2湾岸道路をつくろうという計画がありまして、今東京都が進めている東京港臨海道路、これは大田区の城南島から海底をトンネルで通って、中央防波堤外側のところを通って、キャンプ場のある江東区の若洲のところへ出ていく、こういう道路をつくりつつあります。それと全く平行して隣り合わせで第2湾岸道路をつくる。この第2湾岸道路がいま、三番瀬の中心的な問題になっています。三番瀬を埋め立てをやめないのは、建設省が第2湾岸道路にこだわっているからなんです。これが一つの癌になっているわけです。

渋滞解消のための道路建設論は破綻した

それでは湾岸道路をつくる時にどういう名目でつくったかというと、千葉と東京を結ぶ京葉道路が慢性渋滞だと。だから東京湾岸に湾岸道路をつくってこれで分散させる。そうすれば京葉道路はすくではないかということでした。両方とも今満杯です。そして今度それがいっぱいになったから第2湾岸道路をつくる。こういうようになっているわけでありまして、これをつくられたら東京港ならびに臨海副都心は、周りを10車線の高遠道路で囲まれてしまうわけであります。ですから、臨海副都心というものが、夢と未来のある都市であるならば、こんな馬鹿げたことをやらないで、もっと本当にハゼ釣りが自由にできる町にしていただきたいというふうに思います。そういう点で是非、皆さん方にお願いしたいことがあるのですが、私はこの間、運輸省の港湾局の課長補佐の方、この方は昨年12月に私どもが埋め立て反対で陳情した時に対応した方です。この方にファックスを送りました。有明北の貯木場埋め立ての環境影響評価に対して私たちが意見書を出した。大気汚染だけではありません。水生生物の問題、景観の問題、色々と調べまして、それで意見書を東京都に出しましたが、全く無視されました。それで、この運輸省の方に、是非埋め立て問題についての審査をする時の参考にしてほしいということで、ファックスを送りました。皆さん方からも運輸省の港湾局あるいは環境庁に、あるいは東京都の港湾局長宛に手紙でもいいし、安田さんが出されたように都知事宛の手紙でもいいし、ファックスでもいいし、そういうものをどんどん、色々な方々に送っていただきたい。そしてこれが世論を反映することになると思いますので、是非お願いしたいと思います。私たちも精一杯頑張ってまいりますので、皆さん方と一緒に手を携えてこの運動を成功に導きたいと思います。もう一歩のところです。よろしくお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

コーディネーター
ありがとうございました。続きまして、加藤さんの方からお願いします。

東京湾は本当に豊かな海　加藤氏

技術屋は私一人だけだというので、色々この間会場からの発言とかをお聞きしていて、言っておかないといけないのかなということが幾つかあります。とりあえず四点だけお話させていただきます。まず、東京湾というのは本当に巻かな海だということです。千葉の方も神奈川の方もそうですけれども、もちろん東京都の漁師の方にとっても非常に豊かな海であるということです。ちなみに先ほど昭和30年代の話をしましたけれども、実は江戸前からは昭和37年で漁業権というのが補償されて無くなっています。それ以降は大規模ないわゆる知事とか大臣が許可する漁業はできない状況です。それでは現在行わ札でいる漁業は何かというと、自由漁業といって非常に小規模な漁業なのです。

東京都の海というのは非常に広くて、東京湾から小笠原まであります。年によっても若干違いますが、その中で総水揚げされる漁獲量の中の、20%前後はまだ東京湾から獲れています。こんな狭い、千葉や神奈川に比べても非常に狭い江戸前の海ですが、そこで小笠原まで含めた東京の水揚げの中で2割を占めているというのは大変なことです。ということで、環境さえ整えば豊かな海になるし、また現在も豊かな海であるんだということをまずご認識いただきたいと思います。

二番目ですが、先ほど人工干潟とか、緩傾斜護岸云々という話がありました。後ろにもパネルがありますが、もしああいったものをやるのであれば、埋め立てによってどのぐらい魚の資源が減って、そして逆にそういったものをつくることによって、どのくらい魚の資源が増えるのか。これをちゃんと数字を出さなければいけないわけです。そして皆さんに示さなければいけないのですが、なにか今日のお話を聞いていると、あまりそういったことはやっていないようですので、やはりそういった意味でも、きちんと納得できる数字というのを、調査をして出さなければいけないということだと思います。

十六万坪はハゼの保育園

三番目ですが、先ほど富士見屋さんが、有明の貯木場は川の水が入ってこないので、稚魚の生息にとってあんないいところはないということを話されていました。これはとても重要な指摘です。というのは、江戸前のようなところは内湾というのですが、内湾海域というのは要するに湾の奥の非常に浅いところです。そして川の水がたくさん入ってくるところです。そういったところというのは、すごく環境が変わりやすいです。先ほど言ったように大雨があって、大水が川から入ってくると、それまで塩水だったのが一気に真水になってしまうわけです。そうしますと弱い稚魚なんかはひとたまりもないわけです。

川の水が入って来ないところで、ああいう浅いところがあるということは、非常に稚魚の成育にとって大切なんです。稚魚というのは深いところでは暮らせません。たいていは浅いところで暮らします。ですから、私たちは水産の言葉ではそういうところをナーサリーグラウンドと呼んでいます。日本語になおすと保育園です。魚や海老や蟹の保育園としてとっても大切だということです。ですから、そういう意味でもきちんと守っていかなければいけないということだと思います。

四番目ですが、実は2年ぐらい前の秋に墨田区から私のところに電話がかかってきました。墨田区主催で隅田川でハゼ釣り大会を毎年やっているのだけれども、ある区民の方から、「ハゼ釣り大会なんて資源を減らすような、そういうことを区が旗を振ってやっていいのか」というお問い合わせがあったのだけれど、どういうふうに対応したらいいでしょうかということでした。私は即言いました。「釣り人が千人ぐらい集まって、たかだか一人10匹や20匹のハゼを釣っても、東京港のハゼにはちっとも影響ないですよ」と。「むしろそうやって川と自然と魚と触れ合うことの方がはるかに、とくに子どもさんにとってはいいことだと思いますので、是非やってくださいと説明しまして、構いませんよ」ということで申し上げました。最後になりますが、今日、ハゼの天ぷらの話がだいぶ出ましたが、是非皆さん、今年の夏、8月の末になるとハゼが13センチぐらいになります。ちゃんと氷を持って行って、釣ったらすぐに氷の箱に入れておいて帰ったらお刺身にして食べてください。これはうまいですよ。たまらないです。13センチぐらいになると刺身にできます。頭を落として細づくりになりますけれども、ハゼの刺身は釣り人しか食べることはできません。自分で釣った人しか食べら札ません。これを是非試してみてくださいということで、私の話を終わらせていただきます。

コーディネーター
おいしい話が出まして、色々試さなければいけません埋め立てはどうしてもやめさせなければいけないなというふうに思っているところです。そ札では最後になりますけれども、安田さんの方からお願いします。

安田氏
自分は本当に野球を習う前に兄弟げんかを覚えて、そしてちょうどその頃から釣りというのを覚えました。兄弟げんかをすることによって本当に色々な考え方が子どもながらにできましたし、また、兄弟で釣りをして、水の中の東京都というのも、その価値観をみることもできました。最近では釣りをするような場所があるようで、本当はなくて、つまりどういうことかというと、生物がいないから竿を出さない。本当にそれが環境をみる目安であって、本当にさみしいなと思っています。昨日もあるテレビ局の方と十六万坪について取材をやっていて、十六万坪が終わった後お台場の方にいきました。白い砂をみていてそういった話をしている時に、公園の事務所の方から「ここは都の条例によって船は入れません、ウインドサーフィンの区域です」と言われて出されました。ちょうど警察の船も来まして、「ここは都の条例だから悪いけれど出てくれ」と言われました。ウインドサーフィンをやっている人はいなかったのですが、都の条例ということで、ここはウインドサーフィンの場所だから出ていってくださいというのですが、東京都はあそこにはさほど魚がいないと言っているわけです。魚がいないというのはどういうこ’とか。加藤さんも言われたとおり、やっぱり水があまり良くないというわけです。十六万坪は大変魚はいるのですが、本当にお台場は魚が少ないです。つまり水が悪い。水の悪いところでウインドサーフィンをやらせるというのはいったいどういうことなのか。テレビ局の人と首を傾けました。テレビ局のレポーターの女の子が「東京都が開発するにあたって新しい開発で、穴の開いた蟹が住めるようなブロック壁をつくられたらしいのですが、それについてどう思いますか」と言われましたので、「それは大変な芸術品だ。是非とも家の方に飾っておいてくれ」と。「本当に芸術品だと思いますか」と言われたので、「それは本当に芸術品です。私にも考えがつかなかったことですから」と言いましたそうしたらあまりその女の子もわからなかったみたいですが。「ハゼはどこかに移るでしょう」という、海の男が言った言葉に、そんな勝手に決めるんじゃないよ、そんなことを、本当に言いたかったです。
やっぱり有明は有明でも九州の有明にムツゴロウがいたり、こっちには江戸前のハゼがあって、ムツゴロウがたとえここに来ても、珍しいなという感じで、またこっちのハゼがあっちの有明にいても、ハゼがいるというそんな程度です。つまり歴史と文化があるからこそ、そのものに対しては価値があって、どこかに移るというのは本当につれない言葉だったなと思いました。やはり、海の男が都庁のてっべんから見下ろしている以上は、やはりただの海の男でしかなく、江戸前の海の男というのに変わってもらいたいと思います。
有明貯木場としての利用価値がこれで終わったわけです。つまり、材木を持ってくる必要性がなくなってきたわけです。つまり、加工した木が送られてくるためにあの貯木場の必要性がなくなったのですが、必要性がないからと言って土地にするのかというと、そうじゃなく、元の海に戻すべきだと私は思っています。今度ともどうぞよろしくお願いします。

今後の連動についての提案　中野氏

シンポジウムの方は時間の関係上、この後司会の方の方でまとめていただくのですが、先ほどもちょっと鈴木さんの方からもお話が出ました。

　やはり、これからもこの有明の貯木場を残すためにどういう形の運動を進めていくのかということを考えると、今日のシンポジウムでただ盛り上がっても、これは本当に花火で終わってしまいますので、やはりこの運動を続けるための提案ということで、これは仮の名前ですけれども、「有明貯木場を保存させる会」こういう名称で、会をこの場で皆さんの確認の上で発足させてはどうかなということです。もしよろしければ、ご確認ください。それからまだ何の準備もありませんから、まずこれをできるだけ早く進めるための準備をする方たちということで、今日の主催の会場デモ実行委員会を一応、運動の母体にまずしたいと思います。これには皆さんのお千元にある、色が違うのもあるかもし札ませんが、チラシにあるように、幾つもの団体が参加されています。この団体に今強制的に、自動的に、あなたたちも会だよというのではなく、改めて確認をいただきながら一緒にやれるようにしたいというふうに思います。それから、新たに今日初めてここに来たとか、海上デモに参加して初めてわかったという団体の方や個人の方も是非ご参加をいただきたいと思います。その方法については、今日、この会場から帰られる時に受け付けで、皆さんお名前かあるいは団体名を含めて書かれたと思いますので、そちらの方に是非、チェックを入れて、後でわかるようにしていただければ、またこちらからも連絡を差し上げることができると思います。そういう方法をとりたいと思います。では、皆さんの方からどういう形で連絡をするのかというのもありますので、これはまだ暫定的な意味で、海上デモの実行委員会の連絡先を含めて事務局という形で、皆さんに、このチラシの中でご紹介しています、晴海屋さんにとりあえず連絡先ということで、皆さんと一緒に確認をしておきたいと思います。これですと皆さん今手元にありますので、改めて控えてくださいということもないと思います。それで進めたいなというふうに思います。目的がはっきりしていますので、簡単な運営方法等については、きちんと決めた上で皆さんにもお知らせをして、改めてきちんと集まっていただくような方法を含めて進めていきたいなというふうに思います。よろしいでしょうか。

拍手

有明貯木場埋立反対シンポジウム（2000．3．11）報告書
頒価200円

発行：江戸前の海十六万坪（有明）を守る会
〒136－0074
東京都江東区東砂6－17－12TEL03－3644－13
　　（晴海屋）